
Bulletin of Yokohama Museum of Art No.20

横浜美術館 研究紀要 第20号

Bulletin of Yokohama Museum of Art No.20 2019

目次

横浜市民ギャラリー所蔵の漫画作品について
—「ヨコハマ漫画フェスティバル」(1978年)との関係を中心に
森 未祈 | 5(80)

The Manga Works in the Yokohama Civic Art Gallery and
the 1978 Yokohama Manga Festival
MORI Mineku | 29(56)

鑑賞活動は子どもの何を育てるのか
三ッ山 一志 | 22(63)

How Do Art-appreciation Programs Affect Children?
MITSUYAMA Kazushi | 31(54)

【資料紹介】下村観山画房日記『日記帳』
柏木 智雄 | 83(2)

Introducing Documents : Shimomura Kanzan's *Nikki-cho* (Studio Diary)
KASHIWAGI Tomoh | 33(52)

横浜市民ギャラリー所蔵の漫画作品について —「ヨコハマ漫画フェスティバル」(1978年)との 関係を中心に

森 未祈

1. はじめに

横浜市民ギャラリーには約1,300点の所蔵作品があり、そのうちの76点を占めるのが大型の漫画作品である。1点あたり約100×70cmの着色された一コマ漫画の原画そのものが保存されている。著名な作家を多く含み、同ギャラリーのコレクションの中でも際立つ作品群である。1978年に開催された「ヨコハマ漫画フェスティバル」のために漫画家やイラストレーターが制作し、展示された後に収蔵された。しかしこれまでに展示の機会は少なく、同フェスティバルに関する資料もほとんど残されていないことから、一般に知られる機会に恵まれなかった。

筆者は2014年4月から2018年3月までの横浜市民ギャラリー在籍中、他の学芸員と共にこれらの漫画作品の展示を企画し、関係者に取材する機会を得た。また、展示期間中には多くの関係者や来館者からそれらの作品の価値や希少性が指摘された。今回新たに調査をおこなったところ、作品の存在自体を忘れており、同ギャラリーに収蔵されていたことに驚く当時の出品作家にも出会った。開催から40年以上を経て、当時を知る関係者も少なくなっていることから、できるだけ早期に記録を残しておくべきと考え、本稿では聞き取り調査を中心に、このフェスティバルが開催された経緯と、それにより形成された漫画コレクションの意義について考察する。

2. 「ヨコハマ漫画フェスティバル」について

2.1. 概要

ヨコハマ漫画フェスティバルは、1978年9月15日から10月4日まで横浜市民ギャラリーで開かれた展覧会だ。関内駅・伊勢佐木長者町駅・阪東橋駅の3駅を結ぶ「大通り公園」が同年9月9日に完成したことを記念して開催された事業の一つで、主催は横浜市民ギャラリーを含む「大通り公園完成記念行事実行委員会」である (fig.1)。

横浜市民ギャラリーは横浜市で初めての美術専門の展示施設を擁した社会教育機関として1964年に開館し、二度の移転と運営組織の変遷を経て現在に至



(fig.1)

「ヨコハマ漫画フェスティバル」チラシ 1978年

る¹。ヨコハマ漫画フェスティバルが開催されたのは、関内駅前の横浜市教育文化センター内に位置する二代目の横浜市民ギャラリーで、大通り公園の隣に位置していた。運営は横浜市教育委員会である。

同フェスティバルでは、漫画家やイラストレーターが横浜の名所や歴史、歌、事始めなどをテーマに、大型の作品を描き下ろした。9月12・13日に同ギャラリーの展示室が制作場所として開放され、多くの作家が現場で制作をした。この様子は一般には公開されなかった。完成した作品は、制作時のままパネルに水張りされた状態で1階展示室に並べられた。当時の出品目録は残されておらず、現存の資料では様々に表記されているため、それらから出品作家と出品作品の正確な数を特定することはできない²。

3週間足らずの会期を通しての総入場者数は36,725名だ。当時の新聞2紙は会場の盛況ぶりを以下のように伝えている。「初日の十五日は家族連れなど約三千人が訪れ、親子でクスクス笑ったり、歴史を扱った漫画では『昔は横浜にもこんなことがあった』とパパが授業を始めたり、なかなかのにぎわいぶり。これまで一日千人も入れば大入りだった同ギャラリーでは『こんなに人が入った展覧会は初めて』と満足そう。」「³「漫画家らしいギャグ、風刺が随所に見られるのも、この作品展の楽しさ。(中略)子供から大人まで飽きさせない作品展だ。」「⁴

また、当時の記録映像⁵が残されている。神奈川新聞社の記者だった脇坂茂樹氏が個人的に撮影したもので、横浜市民ギャラリーに保管されていた。そこにはオープン前の展示室で作品を描く作家らの姿(fig.2)と、開幕後たくさんの来館者で賑わう会場(fig.3)が写し出されており、当時の様子を伺い知ることのできる貴重な資料となっている。



(fig.2)
「ヨコハマ漫画フェスティバル」開幕前の会場での制作風景(記録映像からのキャプチャー画像) 1978年



(fig.3)
「ヨコハマ漫画フェスティバル」会場の様子(記録映像からのキャプチャー画像) 1978年

- 1 初代の横浜市民ギャラリーは桜木町駅前の旧中区役所庁舎を利用して開館し、1974年に関内駅前に開設された横浜市教育文化センター内に、2014年には再び桜木町駅を最寄りとする西区宮崎町に移転した。当初は横浜市総務局行政部が運営しており、1975年に横浜市教育委員会、1996年に財団法人横浜市美術振興財団(2002年から財団法人横浜市芸術文化振興財団)に代わった。
- 2 「ヨコハマ漫画フェスティバル」チラシ(1978年、横浜市民ギャラリー)によると主品作家30名、出品点数100点。『市民と学習』(1979年、横浜市教育文化センター文化事業部文化事業課)によると出品作家32名、出品点数80点。『教育文化センター文化事業のあゆみ 昭和49年度から昭和55年度まで』(発行年不詳、横浜市教育文化センター)および『横浜市民ギャラリー30周年記念誌 横浜市民ギャラリー [1964-1994]』(1995年、横浜市民ギャラリー30周年記念誌編集委員会)によると出品作家40名、出品点数76点。『毎日新聞』1978年9月16日16面記事では出品作家28名、出品点数80点、『神奈川新聞』1978年9月16日10面記事では出品作家32名、出品点数80点。
- 3 『毎日新聞』1978年9月16日、16面横浜欄
- 4 『神奈川新聞』1978年9月16日、10面地域欄
- 5 1978年撮影日不詳、Uマチック、カラー、サイレント、14分59秒。2018年にデジタル化をおこなった。

2.2. 横浜市民ギャラリーへの漫画作品の寄贈

ヨコハマ漫画フェスティバルに出品された作品は、閉幕翌日の1978年10月5日付けで横浜市民ギャラリーに寄贈された。現在所蔵されているのは32名の作家による76点である。これらが同フェスティバルに展示された全作品か否かについては、当時横浜市民ギャラリーの係長だった石井利夫氏⁶と、作家の調整役を担ったヒサクニヒコ氏⁷の双方より、同ギャラリーが寄贈を働きかけたのではなく、参加した作家たちが全作品をまとめて寄贈する意向を示したとの証言が得られた。このことから、現在横浜市民ギャラリーが所蔵する76点が、ヨコハマ漫画フェスティバルの全出品作品であると見なしてよいと思われる。本稿の末尾に所蔵作品のリストを掲載する。

3. ヨコハマ漫画フェスティバルの開催経緯

3.1. 横浜市の都市計画における大通り公園の重要性

ヨコハマ漫画フェスティバルの開催のきっかけとなった大通り公園⁸は、当時の横浜市民ギャラリーが入る横浜市教育文化センターの隣に位置していた。長さ1.2km、面積3.6haに及ぶ細長い公園で、「みどりの森」、「水の広場」、「石の広場」の3つのゾーンからなり、オーギュスト・ロダンらの彫刻が設置されている。時代と共に姿を変えてきたが、完成当時は大変な賑わいで、大通り公園は横浜市の都市計画の中で重要な位置を占めていた。

1963年から1978年まで横浜市長を務めた飛鳥田一雄(1915-1990)は横浜市の都市づくりとして六大事業⁹を掲げた。このうちの一つ「市街地中心地区強化事業」は、戦前の中心地区である関内、伊勢佐木町エリアと戦後の中心地区となった横浜駅周辺地区とが分断している状況を解消し、二つのエリアを結びつけてより強力な都心部を形成することが目的だった。その施策の一つが1968年に作成された「緑の軸線」構想であり、その中でも重要視されたのが大通り公園の建設であった。「緑の軸線」構想は、山下公園から日本大通り、横浜公園を経て、市庁舎(「くすの木広場」)をはさみ、大通り公園を通過して蒔田公園への都市の景観を整え、緑とうるおいを与える街づくりを目指すものだった。

『横浜＝都市計画の実践的手法 その都市づくりのあゆみ』によると、大通り公園は「今後の都市整備の軸となるものであり、横浜全市民の多目的利用の行える場とするため、設計には特に力を入れ」¹⁰たとある。巻頭には「祝大通り公園開園」の横断幕を掲げた「石の広場ステージ」の写真が掲載されていることから、当時の横浜市の大通り公園への力の入れようを伺い知ることができる。また、大通り公園と横浜市教育文化センターの関係について、都市プランナーの加川浩氏は「教育文化センター(を：筆者補)前川國男さん

6 いしい・としお=1941年横浜市生まれ、在住。1960～2001年横浜市職員。1972～1980年横浜市民ギャラリーに係長として勤務。本調査のため、2018年3月23日に横浜市民ギャラリーで石井氏に聞き取りをおこなった。

7 ひさ・くにひこ=1944年東京都生まれ。1951年横浜に転居して以降、横浜市在住。漫画、絵本、エッセイ、恐竜研究、テレビ・ラジオ出演など幅広く活動。2017年12月6日横浜市民ギャラリーにてインタビュー収録をおこない、その内容を編集の上「横浜市民ギャラリーコレクション展2018 写真と素描でたどる横浜 1950-1980年代を中心に」(横浜市民ギャラリー、2018年、9-10頁)に掲載した。また、2018年3月23日に聞き取りをおこなった。

8 1970年に開発構想案がまとまり、1972年に建設が始まり、1978年9月9日に完成した。

9 1.市街地中心地区強化事業、2.富岡・金沢地先埋立事業、3.港北ニュータウン建設事業、4.高速度鉄道建設事業、5.自動車専用道路網建設事業、6.横浜港ベイ・ブリッジ建設事業(『横浜の都市づくり 市民がつくる横浜の未来』、横浜市、1965年、47頁)

10 田村明監修、1980年、鹿島出版会、108頁

に設計していただいた理由も、『都心部強化』等の空間をさらに向上させたいという背景がありました。当時の事業において、大通り公園は特別な位置づけなのです。』¹¹と述べている。

こういった一連の横浜市の都市計画の中心人物となったのは田村明(1926-2010)だ。田村はもともと浅田孝(1921-1990)を中心とした民間の地域開発コンサルタントである「環境開発センター」に勤めていたが、飛鳥田に乞われて横浜市に入庁し、企画調整室長、企画調整局長を経て技監となり横浜市の街づくりを推進した。飛鳥田が掲げた六大事業は、環境開発センターがおこなった横浜市の将来計画に関する基礎調査と報告書がもととなっている。

飛鳥田市政が目指したのは、戦後の整備が遅れ、停滞していた横浜市を活性化させることだった。そのために港湾地区の埋め立てや高速鉄道、高速道路、橋の建設など大型の都市開発を推し進める一方で、人を中心とした街づくりの視点も重視した。都市の中心には人々の行き交う姿があるべきだというビジョンに基づき、都心部の高速道路が地下化され、そこに大通り公園が建てられた。大通り公園は当時の横浜市政の都市ビジョンを体現する公共設計だった。

3.2. ヨコハマ漫画フェスティバルの構想と「漫画集団」の参加

こうして完成した大通り公園を記念する事業として、なぜヨコハマ漫画フェスティバルが構想されたのだろうか。出品作家の一人である柳原良平(1931-2015)¹²は2014年に横浜市民ギャラリーからの書面インタビューで以下のように回答している。「都市計画局の人からたのまれて、これからの横浜の未来像などマンガに描いたりしたので、それを大々的にやろうということになったのだと思います。マンガ集団のメンバーだったので仲間に声をかけました。集まるのが好きな人たちですから、みんな喜んで来てくれました。』¹³柳原は1964年に横浜市に転居して以降、横浜を拠点とした。1977年に「横浜市民と港を結びつける会」を結成して代表理事となり、その活動が評価されて同年横浜文化賞(文化活動部門)を受賞するなど、地域の活動にも深く関わっていた。こうした背景から、柳原が横浜市の職員と交流する機会は多かったはずで、先の証言の通り、彼と都市計画局との対話の中からこのフェスティバルの企画が構想されたのだろう。そして柳原が中心となり、「漫画集団」の仲間と、横浜在住の漫画家である森田拳次氏に参加が呼びかけられた。漫画集団は前身の「新漫画派集団」¹⁴から1945年に改名した、大人向けの漫画を描く作家たちの親睦団体である。

1978年8月10日付けの「『ヨコハマ漫画フェスティバル』参加についてのお知らせ」という資料が残っている。「漫画集団会員各位」の書き出しで、発行は「漫画集団事務局 今回担当 柳原良平」とある。そこには以下のように記されている。「先頃の7月例会で、横浜大通り公園オープンを記念する催し『ヨコハマ漫画フェスティバル』への参加が決められましたが、大要について会員の皆さんにお知らせ致します。この催しは横浜市教育委員会の横浜市民ギャラリーの計画によるもので、この9月にオープンされる横浜大通り公園の前にある同ギャラリーの1階展示室で開かれます。今回のフェスティバルの趣旨は一世紀をこえる国際港都ヨコハマの過去・現在・未来にわたるさまざまな顔を漫画家の創造力にゆだねて、楽しく夢のある催物を開き、多くの人々に親しんでもらうというものです。この計画に漫画集団の全面的な協力をという依頼があり、参加を決めたわけであります。」そして最後にこう記されている。「今回の催しの担当は、

11 鈴木伸治企画監修『都市をデザインする仕事』、横浜市立大学、2014年、62-63頁

12 やなぎはら・りょうへい=画家、漫画家、イラストレーター。

13 「柳原良平インタビュー」『閉館記念展 横浜市民ギャラリークロニクル1964-2014』横浜市民ギャラリー、2014年、12頁

14 1932年に近藤日出造、横山隆一、杉浦幸雄らが中心となり結成し、漫画家のマネージメントをおこなった。

柳原良平とヒサクニヒコです。]¹⁵ヒサ氏は漫画集団の会員で横浜在住でもあるため、柳原の要望によってこの企画への参画が決まった¹⁶。こうして柳原とヒサの両氏がこのフェスティバルの企画の中心を担うこととなった。

3.3. 漫画展の開催を決定した横浜市民ギャラリーの先駆性

横浜市民ギャラリーは開催館としてどのように関わったのだろうか。当時の横浜市民ギャラリーの係長であった石井利夫氏は以下のように話している。「当時、横浜の美術活動の核は市民ギャラリーで、館長の山田今次さんが有名でした。市民ギャラリーがいろいろな企画事業をやっていることは世の中に知られていたわけです。それで都市計画局から『自主事業の位置付けでヨコハマ漫画フェスティバルをやってください』と話に来られました。山田さんが『それはおもしろい話だ。横浜の歴史とか現代とかを漫画で表現したらどういうことになるのか非常に興味深い』と答えるやりとりがあり、一気に話が具体化しました。]¹⁷横浜市民ギャラリー初代館長の山田今次(1912-1998)は1964年から1978年3月までの在任で、同フェスティバル開催時にはすでに館長の職を辞していた。しかしこの石井氏の証言により、開催を決定したのが山田であったことが明らかになった。

山田は当時の横浜市政の文化面でのプレーンだった。飛鳥田は市政において文化を支える人物として山田を、都市計画を推進する人物として田村明を右腕とした。山田と田村が本件について話し合う機会もあったと推測される。そのため横浜市の都市計画の中で特に重視された大通り公園の完成記念の事業を横浜市民ギャラリーで実施するのは自然な流れだったと考えられる。

また、山田は現代詩人でもあり、芸術家や美術評論家と親しく交流していた。常に新しいものを取り入れていくことに長け、草創期の横浜市民ギャラリーの運営方針は山田が形づくったと言っても過言ではない。石井氏の話の中には以下のようなエピソードもある。横浜市民ギャラリーで1964年の開館の年から開催している現代美術の年次展「今日の作家展」¹⁸では、教育文化センターから展示を拒否されるような作品もあった。しかし山田は先頭に立って周囲を説得し、展示の実現に漕ぎ着けたという。そのような館長だったからこそ、漫画の展覧会も難なく受け入れることができたのだろう。1970年代に美術専門の社会教育機関が漫画展を開催し、その作品を取蔵したことは他に例がなく、先駆的である。1990年、国立の美術館で初めて「手塚治虫展」¹⁹が開催された。これは国が漫画に芸術としての価値を認めた出来事としても捉えられている。そして日本各地の美術館で漫画展の開催が盛んになるのは1998年頃のことだ²⁰。横浜市民ギャラリーの例はそれを20年も先駆けており、ヨコハマ漫画フェスティバルがいかに先進的であったかが理解できる。横浜市民ギャラリーの運営には、山田今次の、美術だけにとどまらない文化を見渡す広い視点が活かされていたに違いない。

15 柳原良平「ヨコハマ漫画フェスティバル参加についてのお知らせ」1978年8月10日付 漫画集団会員に配布された印刷文書

16 前掲、註7、「ヒサクニヒコ インタビュー」(『横浜市民ギャラリーコレクション展2018 写真と素描でたどる横浜 1950-1980年代を中心に』横浜市民ギャラリー、2018年、9-10頁)に未掲載の部分を横浜市民ギャラリー所蔵の録音音源より書き取り。

17 前掲、註6、石井氏への聞き取り。横浜市民ギャラリー所蔵の録音音源による。

18 1964年から2006年まで横浜市民ギャラリー主催で開催された。同ギャラリーでは、2006年から「ニューアート展」、2011年から「ニューアート展NEXT」、2016年から「新・今日の作家展」に名称を変更して、現代美術の企画展を継続している。

19 1990年7月20日～9月2日、東京国立近代美術館。愛知県美術館、神戸市立博物館、福岡市美術館に巡回した。主催は東京国立近代美術館、日本雑誌協会、朝日新聞社ほか。

20 『現代漫画博物館1945-2005 別冊・資料編』、小学館、2006年、102頁

4. ヨコハマ漫画フェスティバルの特異性

4.1. 柳原良平、ヒサクニヒコの両氏による企画の工夫

ヨコハマ漫画フェスティバルにおいて、横浜市民ギャラリーは事務局としての役割を担った。石井氏は以下のように述べている。「企画の委員には柳原さんにヒサさんが参画して漫画集団とかその他の漫画家に話をしてくれたんだよね。だから我々が動くことはありませんでした。(中略)展示の方法だとか広報の仕方だとかそういうのを市民ギャラリーで受けてやりました。展示の配置などはヒサさんや皆さんがおやりになり、我々はその手助けをしました。私たち職員は黒子的な役割で、展覧会の中心的なことは柳原さんとヒサさんの二人にお任せしたという感じでした。」²¹この役割分担により、柳原とヒサの両氏の手腕が遺憾なく発揮されることとなった。

二人はまず作戦を練った。ヒサ氏は以下のように語っている。「まず基本的に漫画家は締切を守らない。だからただ『描いて』と言っても作品は集まらないだろう。それだったら描くこと自身をお祭りにしちゃおうというので、横浜市民ギャラリーのフロアを全部使って、全員分のパネルと画材と食べ物を用意して、そこでみんなで騒ぎながら絵を描くと。終わった後は盛大に飲みにいこうと。それなら絶対つられてくるに違いないと、そういう呼びかけをしまして。」²²この二人の作戦は功を奏し、32名もの漫画家やイラストレーターが参加する大きな企画となった。石井氏は、作家がこの企画を「意気を感じて」無償で参加していたと証言している。

柳原とヒサの両氏は、横浜の名所や歴史、歌、事始めなどのテーマに沿った年表をつくり、あらかじめ参加作家に配布しておいた。作家たちは各々そこから自由に題材を選び、構想を練った上でギャラリーに集まった。前述した記録映像には作家たちが横浜市民ギャラリーの展示室に机やイーゼルを並べて制作する姿が写されている。この様子をヒサ氏は以下のように回想している。「漫画家は普段の仕事では机の上でせいぜいB5とかA4ぐらいの紙に描くのに、この時は大きく描くので大丈夫かなあとはらはらしたんですけれども。人前で絵を描くってなかなかない。ところが先輩たちを見ていると筆をサササと動かし、でかいのを上手に描く。『あなるほど、こんな描き方もあるんだ』と思ったりね。それから『なんか思ったよりうまくないな』とかね(笑)。絵が出来上がっていくプロセスもおもしろかったんですけれども、『これを絵にしたいな』と思った気持ちだけでも何か伝わるんだというのを感じました。テーマにこだわり過ぎて頭でっかちになるばかりじゃなくて、漫画というのは本当に楽しくて自由に描いていいものなんだとしみじみ感じたものです。楽しかったですよ、すごく。」²³初めは参加者を確保するために現場制作という手法が編み出されたが、結果としてこの展示室内に設えられた即席の共同アトリエが、作家たちの熱がぶつかり合う刺激的な場となったことがわかる。このフェスティバルは単なる展覧会ではなく、作家たちが一堂に会し切磋琢磨する場ともなったのだ。ヒサ氏が意図した通り、それはまさにお祭りのようで、現在で考えても稀有な企画だと言えるだろう。

21 前掲、註6、石井氏への聞き取り。横浜市民ギャラリー所蔵の録音音源による。

22 「ヒサクニヒコ インタビュー」『横浜市民ギャラリーコレクション展2018 写真と素描でたどる横浜 1950-1980年代を中心に』横浜市民ギャラリー、2018年、10頁

23 同前

4.2. 時代を写す「漫画集団」の風刺性

ヨコハマ漫画フェスティバルに参加した作家の多くは、大人向けの一コマ漫画や風刺漫画を得意とした。そのため、一コマに表現を凝縮させることはお手の物だった。特に、ひねりの効いた笑いや情緒にあふれた描写、時代を反映した表現など、大人が楽しめる奥深い作品が多い。例えばヒサ氏が三溪園を描いた作品を、横浜市民ギャラリーが所蔵する櫻庭彦治が描いた油彩画《三溪園の五月(1)》(1979年、タイトルは当時の表記に基づく)と比較すると、櫻庭は豊かな植栽に囲まれた三重塔を描いているのに対し、ヒサ氏が描いたものはだいぶ様子が違う。《三溪園雪景色》と題された作品(作品リストCA-038、タイトルは当時の表記に基づく)には、雪が降る庭園の奥に三重塔、さらにその先には根岸の製油所の紅白の煙突が描かれており、手前にはそれを眺める和服姿の女性とロボットが佇んでいる。近代化により横浜が得たもの、失ったものを暗示するような表現だ。

漫画は、ユーモアや情感を通して、一コマの中に社会への風刺やメッセージを象徴的に表すことができる。漫画家は、物事を省略したりデフォルメしたりしてその本質を際立たせ、鑑賞者に訴える技術を持っている。また、魅力的なキャラクターを生み出し、その言動を通してメッセージを伝えることもできる。笑いやユーモアの背後に、時代のリアルな問題意識や社会への痛烈なメッセージを暗示させることも可能だ。ペンや絵筆が一本あれば、過去、現在、未来、場所を問わず、一コマの中に時空を超えた表現をすることもできる。このように漫画は、作家の技術と創造性によって一コマで物事を象徴的に表現し、人々に伝えることができるのだ。

漫画集団の全面協力のもと1954年に創刊した『漫画読本』²⁴は、大人たちの支持を得て大ブームになったが、1970年には休刊してしまう。それには、1950年代の終わり頃より子どものための漫画がコマ数の少ないものから長いストーリーの漫画へと移り変わり、大人向けの漫画にも波及して漫画の主流になっていったことが背景にある。次第に一コマ漫画や風刺漫画の発表の場は少なくなっていった。さらにヒサ氏が「一コマ漫画の作品はうまく残っていないんですよ。政治漫画みたいな時事漫画は、そのときを過ぎるとわからなくなってしまふから単行本にまとまったりしない」²⁵と指摘するように、一コマ漫画や風刺漫画は作品としての継承という点において不利な表現形式であるようだ。漫画集団は、日本で大人向けの漫画が興隆した時代を代表する存在であり、彼らが手がけた作品が横浜市民ギャラリーという公的機関に収蔵され、後世に継承されたことの意義は深いと言えるだろう。

24 文藝春秋新社(1966年から文藝春秋に改名)刊行。海外の漫画、戦前の日本の漫画、新作の漫画、エッセイを中心に構成され、戦後日本の「大人漫画」を牽引した。

25 前掲、註7、ヒサ氏への聞き取り。横浜市民ギャラリー所蔵の録音音源による。

5. 漫画コレクションの保存、活用と意義

5.1. 保存方法の見直し

これらの漫画作品はしばらくの間、制作当時のままパネルに水張りされた状態で保管されていた。1996年、横浜市民ギャラリーの運営組織が財団法人横浜市美術振興財団に移行すると学芸員が配置され、保存方法の見直しがおこなわれた。作品をパネルから外し、本紙のみの状態にして保存箱で保管するようになった。後述する1996年の展示の記録写真(fig.4)では、パネルに水張りされた状態の作品が確認できることから、その後の処置であることがわかる。これにより、合板パネルの影響による作品の劣化を防ぐことができたと考えられる。その甲斐もあり、多くの作品は現在も良好な状態で保存されている。2014年以降は作品のマット装を進めており、2019年2月現在49点が完了し、27点が未着手となっている。展示には額の準備も必要である。



(fig.4)
「横浜市民ギャラリー収蔵作品巡回展 漫画になったヨコハマ」会場風景 1996年

5.2. 再認識された漫画コレクション

ヨコハマ漫画フェスティバルの閉幕後、漫画コレクションが展示された記録として残っているのは、1996年7月16日から7月22日にかけて相鉄ジョイナスで開催された「横浜市民ギャラリー収蔵作品巡回展 漫画になったヨコハマ」²⁶だ。その後しばらくこれらの作品が脚光を浴びることはなかった。そして18年の空白期間を経て、2014年10月10日から10月29日に開催された「開館記念展 横浜市民ギャラリークロニクル1964-2014」²⁷で大々的に取り上げられることとなった(fig.5)。横浜市民ギャラリーが関内から桜木町に移転する際の約1年半の休館期間に所蔵作品の調査が進み、これら漫画作品の重要性が学芸員に再認識されたためだ。開館記念展では4フロアの展示室を全て使い、そのうちの3階部分で40点の漫画作品の展示と記録映像の上映をおこなった。久しぶりの大規模な展示となったため、これらの作品を初めて目にする来館者が多く、注目を集めた。以降、漫画作品は横浜市民ギャラリーのコレクション展で積極的に公開されている。



(fig.5)
「開館記念展 横浜市民ギャラリークロニクル1964-2014」会場風景 2014年 撮影：加藤健

また、開館記念展の関連事業として「漫画家親子対談 ヒサクニヒコ×久正人」²⁸を開催したことも付け加えておきたい。ヒサ氏の息子であり漫画家の久正人氏は、スタイリッシュな表現を特色とするストーリー漫画で人気を博す1976年生まれの漫画家であり、対するヒサ氏は1960年代後半のデビュー以降、一コマ漫

26 主催は財団法人横浜市美術振興財団・横浜市。

27 主催は横浜市民ギャラリー（公益財団法人横浜市芸術文化振興財団）。担当学芸員は大塚真弓、森未祈、齋藤里紗。

28 マンガナイト代表山内康裕氏の企画協力により実現した。

画を活動の基軸としてきた。親子に共通する興味関心が垣間見えながらも、異なる世代における表現形式の違いが浮き彫りとなる対談になった。久正人氏はこの催しのために描き下ろした作品を投影しながら、時間とストーリーをコマ割りの中でどのように展開させていくかを説明した上で、ヒサ氏に「一コマ漫画では時間をどう表現するのか」という質問を投げかけた。するとヒサ氏はスケッチブックとマジックを取り、その中から考え事をする人物が描かれたページを開き、即興でクモの巣を描き加えた。画中の人物が思索に耽り長い時間が経過した状況を一コマで端的に表し、久正人氏と聴衆を驚かせた。父子いずれも漫画という視覚文化特有の表現を用いているが、形式が異なる点に世代の差が浮かび上がる。このように、1978年に描かれたヨコハマ漫画フェスティバルの漫画作品やその表現のあり方を、異なる世代の表現者の視点を介在させながら読み解くことは、それらの価値を再発見していく機会となるだろう。

この他、やなせたかしの《大佛次郎記念館上の鞍馬天狗》(作品リストCA-069)は、2018年に大佛次郎記念館の40周年記念展示に出品された²⁹。これらの漫画作品には横浜の名所を描いたものも多いため、今後この漫画コレクションの周知が進めば、このような活用や他館との連携の可能性も大いに期待できる。

5.3. 漫画コレクションの意義

これまで述べてきた通り、ヨコハマ漫画フェスティバルは大通り公園の完成をひかえた都市計画局と柳原良平との交流の中で発案され、都市計画局が横浜市民ギャラリーへ開催の打診をし、初代館長の山田今次が実施を決定した。作家たちは、大通り公園の完成を記念するフェスティバルのために横浜の過去・現在・未来をそれぞれ一枚の漫画に自由に表現した。それらが横浜市民ギャラリーに収蔵され、漫画コレクションが形成された。結果として、現在に継承された作品群は大通り公園の完成を記念するモニュメント的な意味を持つようになった。残された作品によって私たちは1978年の出来事を知り、当時を想起することができる。一般に大規模な公共施設の落成記念として彫像などの芸術作品を設置する場合、特定の権威ある芸術家に制作を依頼することが通例と思われる。しかしここでは「漫画集団」を中心とする複数の作家たちによって自由に制作された作品群が、作家たち自身の発意によってフェスティバルの場でもあった当の公的機関に寄贈されたことに大きな特徴がある。また、当時のフェスティバルには多くの来館者が駆けつけ、社会に歓迎された。そこには地域に根ざした祝祭性を感じることができる。ヨコハマ漫画フェスティバルは、横浜市政と作家の創造性が幸運にも実を結び、市民に歓迎された祭りとなったと言えるだろう。

このように、これらの漫画作品はコミュニティに深く根ざし、横浜という場所でしか成立し得ない、まさにサイトスペシフィックな作品だ。作品が生まれた背景には横浜市の都市計画が存在し、作家は横浜という場所の特性を作品に取り込んだ。現場で制作された作品からは、作家が実際に横浜を訪れたときの直感や感触も滲み出てくるはずだ。鑑賞者は作家の目を通して描かれた横浜の姿を通して、地域を様々な視点から見つめ直すことができるだろう。これらの漫画作品は、地域を読み解く資料としても他に類を見ない価値を持ち続けるのではないだろうか。

また、一コマ漫画、風刺漫画といったジャンルは、現在ではストーリー漫画の台頭により触れる機会が少なくなっており、公的機関にまとまった数の作品が保存されたことは大変意義深い。『漫画読本』が大ブームになるなど、日本の漫画界で一時代を築いたといっても過言ではない漫画集団に所属した作家たちの作品群は、日本の漫画史という視点からも極めて重要な資料である。作家の個性を色濃く感じられる作品からは、描かれた当時の風俗や時代状況が克明に伝わってくる。そういった点からも、これらの作品は時を

29 大佛次郎記念館40周年記念 テーマ展示 I「大佛次郎記念館の40年 1978-2018」の前期展示(3月15日～5月6日)に出品。主催は大佛次郎記念館(公益財団法人横浜市芸術文化振興財団)。

経るほどに重要性を増すに違いない。

加えて、これらの漫画作品を、漫画を専門としない横浜市民ギャラリーが所蔵することにも価値を見出すことができる。同ギャラリーでは、漫画作品を油彩画や日本画と並べて展示することもある。これにより絵画の鑑賞を目的に訪れた来館者が、初めてこれらの漫画作品の存在を知り関心を示すことがあった。今後その逆もあり得るだろう。漫画が異なるジャンルの作品と並ぶことで、そのユーモアや風刺性といった特質がより顕著に現れるなど、作品の対比による効果が生じている。漫画作品が、横浜市民ギャラリーのコレクションの価値をも高めていると言えるだろう。

6.おわりに

本稿では、横浜市民ギャラリー所蔵の一連の漫画作品の成立と受贈の契機となったヨコハマ漫画フェスティバルの開催経緯と実相を明らかにした上で、同ギャラリーのコレクションとしての漫画作品の意義を考察した。個々の作品の詳細や、日本の漫画史におけるこれらの作品の位置付けについては十分に触れることができなかつたため、今後の課題としたい。

2018年の横浜市民ギャラリーのコレクション展³⁰において「漫画家・ヒサクニヒコが描いた横浜」と題した特集展示をおこなった。その際筆者は「職業体験学習」で受け入れた中学生たちと交流する機会を得た。それは、作品の展示方法について改めて考えることにもなった。一コマ漫画になじみのない若い世代は、鑑賞の仕方がわからないということに認識したのだ。ストーリー漫画が主流となった現在、一枚の絵の中に隠された物語やメッセージを能動的に読み解くという意識が希薄になっているようだ。本来であれば、漫画の中の笑いの意味を言葉にして解説することは無粋であるように思われる。しかし、発表から40年以上を経た現在、当時の時事的テーマなど、描かれた内容が一般には分かりにくくなった作品もあるため、作品ごとに解説を添えて展示することも有効なのかもしれない。こういった発見や調査結果を、今後の漫画作品の活用、公開に活かしていきたい。

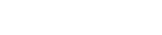
謝辞：調査にご協力くださったヒサクニヒコ氏、石井利夫氏、故・柳原良平氏、日本漫画家協会、作品図版の掲載をご承諾くださった作家および著作権継承者の方々に深くお礼申し上げます。

(横浜美術館鑑賞教育エデュケーター／学芸員)

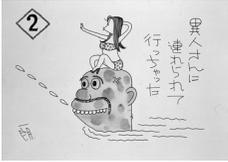
30 2018年3月2日～18日「横浜市民ギャラリーコレクション展2018 写真と素描でたどる横浜 1950-1980年代を中心に」。主催は横浜市民ギャラリー（公益財団法人横浜市芸術文化振興財団）。

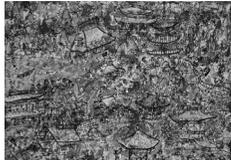
横浜市民ギャラリー所蔵の漫画作品 リスト

- 凡例 1. 作品データは、横浜市民ギャラリーの所蔵品番号、作家名、作品名、制作年、技法、サイズ(縦×横)の順に掲載した。所蔵は全て横浜市民ギャラリーである。
2. 固有名詞の表記については、収蔵時のタイトル通りとした。
3. 全ての作品はカラーだが、図版はモノクロで掲載した。

 <p>©赤塚不二夫</p>	<p>CA-001 赤塚不二夫 国際都市横浜 1978年 ペン、水彩、紙 72.4×102.6cm</p>		<p>CA-005 岩本久則 外人墓地 1978年 水彩、アクリル、紙 102.7×72.3cm</p>
	<p>CA-002 出水永 ガス事始 1978年 ペン、水彩、紙 102.6×72.5cm</p>		<p>CA-006 岩本久則 クイーンエリザベスの鎖鎖(カンカン虫) 1978年 アクリル、水彩、紙 102.4×72.4cm</p>
	<p>CA-003 イワタタケオ 雨のブルース 1978年 水彩、紙 102.5×72.5cm</p>		<p>CA-007 岩本久則 日曜学校(飛び方教室) 1978年 ペン、アクリル、水彩、紙 102.7×72.5cm</p>
	<p>CA-004 イワタタケオ 黒船 1978年 インク、水彩、紙 102.0×72.0cm</p>		<p>CA-008 小川哲男 西洋床屋 1978年 水彩、サインペン、紙 72.5×102.7cm</p>
	<p>CA-010 小川哲男 横浜の文士と画家 1978年 アクリル、水彩、ペン、鉛筆、紙 72.3×102.3cm</p>		<p>CA-009 小川哲男 日本で初めてのビール工場 1978年 アクリル、水彩、紙 72.3×102.6cm</p>

	<p>CA-011 小島功 サンタ横浜上陸 1978年 アクリル、グワッシュ、水彩、紙 102.1×72.1cm</p>		<p>CA-017 塩田英二郎 ヘボン博士 1978年 パステル、マジック、水彩、鉛筆、紙 72.5×102.5cm</p>
	<p>CA-012 小島功 石けん事始 1978年 インク、水彩、紙 72.6×102.6cm</p>		<p>CA-018 杉浦幸雄 洋行帰り 1978年 墨、水彩、紙 102.4×72.3cm</p>
	<p>CA-013 小林治雄 米軍かまぼこ兵舎 1978年 ペン、アクリル、水彩、紙 102.5×72.5cm</p>		<p>CA-019 すずき大和 赤い靴 1978年 アクリル、マジック、紙 102.3×72.2cm</p>
	<p>CA-014 小林治雄 横浜駅西口広場 1978年 ペン、アクリル、水彩、鉛筆、紙 102.5×72.5cm</p>		<p>CA-020 すずき大和 想い 1978年 アクリル、マジック、ポスターカラー、紙 102.4×72.4cm</p>
	<p>CA-015 桜井勇 絵タイル 1978年 水彩、アクリル、鉛筆、紙 102.4×72.5cm</p>		<p>CA-021 鈴木義司 青い目をしたお人形 1978年 マジック、水彩、紙 102.5×72.4cm</p>
	<p>CA-016 桜井勇 窓を開ければみなとが見える 1978年 ペン、水彩、紙 102.5×72.5cm</p>		<p>CA-022 多田ヒロシ 青い目の人形 1978年 水彩、ポスターカラー、アクリル、紙 72.4×102.4cm</p>

	<p>CA-023 多田ヒロシ 日本最初の潜水業 1978年 水彩、アクリル、マジック、紙 102.8×72.6cm</p>		<p>CA-029 中島弘二 宇宙旅館「ひかわ」 1978年 ポスターカラー、墨、水彩、マジック、紙 72.4×102.8cm</p>
 <p>©ちばてつや</p>	<p>CA-024 ちばてつや 暗闇に黒船 1978年 水彩、マジック、木、糸、紙 72.6×102.7cm</p>		<p>CA-030 中島弘二 未知との遭遇 1978年 水彩、墨、マジック、紙 72.7×102.6cm</p>
	<p>CA-025 富永一朗 赤い靴 1 1978年 マジック、水彩、紙 72.8×102.6cm</p>		<p>CA-031 西村宗 金沢海の公園 1978年 マジック、水彩、紙 72.5×102.5cm</p>
	<p>CA-026 富永一朗 赤い靴 2 1978年 マジック、水彩、紙 72.4×102.5cm</p>		<p>CA-032 西村宗 新ふとう 1978年 マジック、水彩、紙 72.7×102.6cm</p>
	<p>CA-027 永井保 山ノ手・ゲーテ座 1978年 パステル、水彩、紙 72.6×102.7cm</p>		<p>CA-033 浜田貫太郎 クジラは大事に育てよう 1978年 マジック、水彩、パステル、紙 102.5×72.4cm</p>
	<p>CA-028 永井保 夜の横浜大栈橋 1978年 水彩、マジック、紙 72.6×102.7cm</p>		<p>CA-034 浜田貫太郎 横浜は昔昔から国際的な港でした 1978年 マジック、水彩、パステル、サインペン、紙 102.6×72.6cm</p>

	<p>CA-035 茨田茂平 秋の三溪園 1978年 ペン、クレヨン、パステル、紙 72.6×102.8cm</p>		<p>CA-041 ヒサクニヒコ 地下鉄開通 (モグラの運転手さん) 1978年 マジック、水彩、アクリル、紙 102.5×72.5cm</p>
	<p>CA-036 茨田茂平 戦時中の金沢八景 1978年 ペン、クレヨン、パステル、紙 72.4×102.7cm</p>		<p>CA-042 前川かずお 牛なべこと始め 1978年 水彩、マジック、紙 72.1×102.5cm</p>
	<p>CA-037 ヒサクニヒコ SL開通(明治5年) 「横浜-新橋 30K」 1978年 マジック、水彩、紙 72.6×102.4cm</p>		<p>CA-043 前川かずお こんな海づり公園はごめん 1978年 水彩、墨、マジック、 ポスターカラー、紙 102.2×72.5cm</p>
	<p>CA-038 ヒサクニヒコ 三溪園雪景色 1978年 水彩、マジック、紙 102.5×72.3cm</p>		<p>CA-044 牧野圭一 遅れてきた黒船 1978年 水彩、アクリル、ペン、 ポスターカラー、紙 102.8×72.6cm</p>
	<p>CA-039 ヒサクニヒコ 市電廃止(昭41-47) [開通明治37年神奈川 -大江橋間] 1978年 マジック、水彩、アクリル、紙 102.7×72.6cm</p>		<p>CA-045 牧野圭一 空中華街 [ラーメンの新しい食べ方] 1978年 水彩、アクリル、インク、紙 102.6×72.6cm</p>
	<p>CA-040 ヒサクニヒコ 占領下の伊勢佐木町 [カマボコ兵舎の林立] 1978年 マジック、水彩、アクリル、紙 102.5×72.3cm</p>		<p>CA-046 水野良太郎 国際港 1978年 水彩、マジック、紙 72.3×102.4cm</p>

	<p>CA-047 水野良太郎 港の見える丘公園 1978年 水彩、アクリル、紙 72.6×102.6cm</p>		<p>CA-053 森田拳次 ブルース 1978年 マジック、水彩、紙 102.4×72.4cm</p>
	<p>CA-048 御法川富夫 ヨコハマ未来図 1978年 鉛筆、ペン、クレヨン、 ポスターカラー、紙 102.9×72.5cm</p>		<p>CA-054 森田拳次 横浜スタジアム・横須賀線 1978年 マジック、水彩、紙 102.7×72.3cm</p>
	<p>CA-049 森田拳次 高速道路 1978年 マジック、水彩、クレヨン、紙 102.6×72.6cm</p>		<p>CA-055 森田拳次 横浜のこのごろ - 海釣り公園 1978年 マジック、水彩、紙 103.2×72.6cm</p>
	<p>CA-050 森田拳次 写真ことはじめ 1978年 マジック、水彩、ペン、紙 72.7×102.7cm</p>		<p>CA-056 矢尾板賢吉 おむかえ 1978年 木炭、紙 102.5×72.3cm</p>
	<p>CA-051 森田拳次 浜っ子ことば 1978年 マジック、水彩、 ポスターカラー、墨、紙 102.5×72.5cm</p>		<p>CA-057 矢尾板賢吉 濃霧の夜明 1978年 水彩、パステル、紙 102.8×72.5cm</p>
	<p>CA-052 森田拳次 ビール 1978年 アクリル、コラージュ、紙 102.8×72.6cm</p>		<p>CA-058 八島一夫 ヨコハマ・ドンタク 1978年 マジック、水彩、紙 102.3×72.3cm</p>

	<p>CA-059 八島一夫 横浜大空襲500機 [450まで数えられるってどう でもよいのよ早く逃げて] 1978年 マジック、水彩、紙 102.7×72.4cm</p>		<p>CA-065 柳原良平 元横浜正金銀行 (神奈川県立博物館) 1978年 ポスターカラー、紙 102.7×72.6cm</p>
	<p>CA-060 柳原良平 運上所と英一番館 1978年 ポスターカラー、紙 72.1×102.4cm</p>		<p>CA-066 柳原良平 横浜海洋科学博物館 1978年 ポスターカラー、マジック、 ペン、紙 102.6×72.6cm</p>
	<p>CA-061 柳原良平 大通り公園 1978年 ポスターカラー、紙 102.6×72.7cm</p>		<p>CA-067 柳原良平 横浜ドックのカンカン虫 1978年 ポスターカラー、ペン、紙 72.6×102.9cm</p>
	<p>CA-062 柳原良平 開港記念会館 1978年 ポスターカラー、紙 102.5×72.4cm</p>	 <p>©やなせたかし</p>	<p>CA-068 やなせたかし あんたが主役 港のマリントワー 1978年 アクリル、紙 102.7×72.4cm</p>
	<p>CA-063 柳原良平 機械製氷発祥之地 1978年 マジック、水彩、紙 72.5×102.8cm</p>	 <p>©やなせたかし</p>	<p>CA-069 やなせたかし 大佛次郎記念館上の鞍馬天狗 1978年 アクリル、マジック、紙 101.4×71.7cm</p>
	<p>CA-064 柳原良平 新港埠頭赤煉瓦倉庫 1978年 ポスターカラー、紙 72.2×102.5cm</p>	 <p>©やなせたかし</p>	<p>CA-070 やなせたかし 美味求真街 1978年 マジック、アクリル、紙 102.6×73.6cm</p>

 <p>©やなせたかし</p>	<p>CA-071 やなせたかし 港の花 1978年 アクリル、紙 102.6×72.5cm</p>		<p>CA-074 矢野徳 遊郭之図 1978年 マジック、水彩、紙 72.4×102.8cm</p>
 <p>©やなせたかし</p>	<p>CA-072 やなせたかし 山手教会 1978年 水彩、アクリル、マジック、紙 102.7×72.5cm</p>		<p>CA-075 山下紀一郎 このごろこのテの顔が モチやすよ ジャパンパンチ発刊 1978年 水彩、墨、紙 102.7×72.5cm</p>
	<p>CA-073 矢野徳 伊勢プラザ之図 1978年 マジック、水彩、紙 72.7×102.6cm</p>		<p>CA-076 山下紀一郎 らしゃめん あたしゃどういうわけか ラーメンが大好き 1978年 鉛筆、水彩、アクリル、紙 102.6×72.5cm</p>

鑑賞の活動は子どもの何を育てるのか

三ツ山 一志(横浜市民ギャラリー)

はじめに

横浜美術館の開設準備をしていた1980年代は各地に美術館が建てられる一方、〈美術館教育〉と呼ばれる研究が美術館の内外で盛んであった。これらは作品を展示するだけの美術館ではなく、「市民のための」という欧米の美術館のあり方を学ぼうとするもので、「市民」とは大人も子どもも障がいを持っている人も、である。

アメリカの美術館のあり方を述べている事例がある。

「美術館は人々に芸術の素晴らしさを与えるところです。美術館の第1の使命は、芸術品を手に入れて、その長所を活かすようにして展示することです。第2の使命は、人々が足しげくやってくるように奨励し、彼らが美術館から最大限のものを引き出せるように手助けすることなのです。」「私たちは、教育を通して、鑑賞する目と愛情が生まれてくるものと信じています。芸術について、公立学校で、地域社会で、遊び場で、話していくべきなのです。」

これは1916年にシカゴ美術館の館長ニュートン・カーペンターが、アメリカ美術館協会で行なった講演からの引用である。私たちは、美術館での教育の考え方と実践例が100年も前から確立していたことと、私たちが知恵を絞って考えだす教育プログラムの多くがすでに実行済みであることに驚くのである。

横浜美術館は1989年3月25日から10月1日まで開催された横浜博覧会を経て、11月3日に開館した。私は横浜博覧会の閉幕から横浜美術館の開館までの1ヶ月の期間に、アメリカ国務省のインターナショナル・ビジター・プログラムという制度を使い、アメリカ全土の主要美術館および子ども博物館の教育普及活動の視察をさせていただいた。視察報告は『アートエデュケーション』誌に寄稿させていただいた¹。

これは私の担当する「子どものアトリエ」の運営について横浜市美術館設計条件研究委員会の答申のひとつにメトロポリタン美術館のジュニア・ミュージアムという活動を参考にしなさいという記述があり、「本場の現状を見なければ」とアメリカの主要な美術館の子どものための活動を見せていただいたのである。

メトロポリタン美術館ではDocent(ドーセント=展示解説者)の担当者から、美術館を訪れる人たちを年齢や性別ではなく経験で5つに分けて考えるというお話をうかがった。1番目は〈はじめて美術館を訪れる人〉、2番目は〈どう見ていいのかわからない人〉、3番目は〈見たいものが決められる人〉、4番目は〈展覧会の趣旨を理解しながら見られる人〉、5番目は〈展示されている作品だけではなく、展示されていないほかの作品や類似する作家や時代などに興味を持てる人〉などという分け方であったと思う。3番目以降の人たちは美術館での鑑賞に慣れていることがわかるが、担当者は「1番目と2番目の〈はじめて美術館を訪れる人〉や〈どう見ていいのかわからない人〉は、美術館で“迷子”になってしまうので、当然ながら私たちのいちばん配慮が必要となる人たちです」と説明してくれた。なるほどと感心したことを覚えている。ただし、個人的に訪れる来館者は見かけではその経験値はわからない。その点、子どもは明らかに〈はじめての美術館〉

1 三ツ山一志(横浜美術館子どものアトリエ担当)「海外情報 アメリカのChildren's Workshop事情」『アートエデュケーション』Vol.2 No.2、建帛社、1990年4月、105-109頁

だということがわかる。横浜美術館でははじめて訪れる子どもたちの寄り添い役が子どものアトリエである。はじめての美術館来訪が楽しく充実したものであれば、彼らのこれからの生活の一部に美術館が存在することになる。

横浜美術館では子どものアトリエが4歳から12歳までの幼児、児童を受け持つ。子どものアトリエの設置目的のひとつに「子どものアトリエは、『美術館は、大人が利用するもの』という常識を越え、子どもたちが美術に接し、体験的に学べる施設を提供し、子どもたちが自分の力で豊かに素直に成長していく手助けを行うことを目的として設置される」とある。これは「子どもの成長を助けることを目的に、素材や創作体験および鑑賞活動をその手段として使う」ということである。子どものアトリエでは鑑賞という活動が「作品を理解させる」という性急な目的ではなく、子どもが自分自身の心に気がつく活動であると考えている。子どものアトリエを訪れる幼稚園、保育園、小学校や各種学校、特別支援学校を対象にした「学校のためのプログラム」の中において、素材体験のほかギャラリーツアーや鑑賞プログラムなどの鑑賞活動を行ってきた。それらの活動を通して子どもたちの心の発達の事例を述べてみたい。

学校と美術館

日本は明治5年の学制発布以後、美術教育を学校で行って来た長い歴史がある。日本では、美術が苦手だという人でも、描いたりつくったりすることができる。それは、日本の美術教育がある意味で手を豊かにするという点を優先した技術教育であったから、美術が好き、嫌いという本人の意志とは別に、授業の中で描きつくることを求められるので、それなりに作品ができてしまう。

描きつくるのが優先する日本の美術教育に欠けていたのが〈鑑賞教育〉であるということは、かねてからいわれてきたことである。なぜならば、学校の近隣に美術館がなく、本物を見る機会が少なかったからである。それらを補ってきたのが美術の教科書や図版・画集などである。ゆえに鑑賞に不慣れな人たちが美術の教科書に載っている「有名な作品」「よいといわれている作品」を見る、受け身の鑑賞になってしまうのは仕方のないことであった。

平成元年版の小学校学習指導要領において、それまでは中学校の美術で学んでいた〈鑑賞〉が小学校5、6年生の図画工作の目標の中にあげられ、国内外の美術作品をとりあげ鑑賞することが全国にはじめて指示された。平成10年版の小学校学習指導要領においては「地域の美術館を利用すること」と追記されている。これは学校教育で行なわれてきた図版を通した知識としての鑑賞から美術館で作品に出会い味わう鑑賞への転換といえよう。美術館は子どもを受け入れるために子どもを知る必要が求められることになった。

心の作用としての鑑賞－他問自答

歴史や物語や主義や主張を表現の題材にした作品は、作品や作者の情報だけではなく、表現の背景にあるものの理解ができた方が鑑賞は広がる。現代美術も目前では感覚的な受け止め方をするが、作品の時間が過ぎれば時代背景が見え、それらを客観的に解説できるときがくる。美術館は作品を展示するだけではなく、作品を研究し見つけ出したことを鑑賞者に伝えることが求められる。ゆえにギャラリーには作品だけではなく多様な解説文が掲示される。鑑賞に慣れている人には解説は見て考える上でのヒントになるし、

彼らは必要に応じて読み分けることができる。

鑑賞が教育として捉えられ「作品を正しく理解する」ことに重きを置いたとき、鑑賞は勉強になってしまう。「自分の思いは正解か不正解か」鑑賞に慣れていない人はそれらの解説を読まないで作品を正しく理解できないと思い込んで、作品を見るよりキャプションや解説文ばかり見入ってしまう。そんな人には「鑑賞は、まず好きかそうでないかという自分本位の見方でいいのですよ。お気に入りの作品はありますか?」と言葉掛けをして肩の力を抜いてあげたいものだ。

鑑賞は、広義的に説明される〈芸術作品のよさを味わい楽しみ理解する〉という知識と経験を元にした客観的な行為とは別に、作品を見て思うという自分の思いに「どうしてそう思うのか」と自ら問いかけ、その思いを自覚する心の作用を自覚する〈自問自答〉という主観的行為であるとも考えることができる。なぜならば鑑賞の主体はまず自分自身だからだ。この場合、作品は心を動かす触媒の役目で、鑑賞者は自分の心の動きにもう一人の自分が反応し、自問し自答する。子どもの鑑賞はまず自分で見て、自分で思う〈自問自答〉ができるように導いてあげるべきだと考える。

幼児は心の動きに言葉が与えられると〈思う〉ようになる。〈思う〉ことは主観の芽生えである。彼らは反射的に思い、話す。「どうしてそう思ったのか」という問いかけを自らはできない。いわば〈思えばなし〉が幼児の特徴である。まさに感覚的に生きている彼らには、見たものや感じたものを、描いたりつくったり、つまり何らかの行為を起こすことで意識化するメカニズムがある。だから幼児との鑑賞では、〈話す〉という行為、つまり対話形式により、彼らに自分の口から話させ、それらを意識化させるのである。ここでは、感じたことや思ったことを自分で言えることが目的だ。

対話を通した鑑賞は、幼児に限らず、慣れていないおとなにも有効である。相手の思考や知識の度合いを押し量りながら、鑑賞者の知っていることに合わせ話を展開でき、自発的な鑑賞へと導けるからである。

幼児との鑑賞では「この絵好きな人?」「どうして好きか言える?」と質問してあげると、いろんな答えが返ってくる。人物画では「この人はどんなことを思っているんだろう?」という問いにもほほえましい答えが返ってくる。これは自身で行う〈自問自答〉ではなく、私たちの質問に答えながら思いを自覚していく〈他問自答〉という導き方である。むろん質問には正解はない。このようなやり取りは「思ったことを自分の言葉で言える」という練習で、「よく言えたね」と感心してあげることが大切だ。子どもの鑑賞は「心が動いてる?」という確認の作業が出発点だ。ここではいっしょに見ている作品はあくまでも対話を成立させる資料にすぎない。ゆえに横浜美術館所蔵のイサム・ノグチの《真夜中の太陽》は昼の神様と夜の神様がケンカをして仲直りをしないから神様の神様から丸い輪にされたという作り話をしながら作品を見ることになる。ちなみにクレス・オルデンバーグの《反転Q》は美術館を建てるために地面を掘っていたらでてきた恐竜のたまご。「どんな恐竜の赤ちゃんが入ってるんだろうね」と。

なんだろう?という見方

小学生は〈知らない〉ことを恥ずかしがる。作品を前に「何だと思いますか?」と質問すると、正しく答えなければいけないと思うようで口をつぐむ子が多い。確かに学校では〈質問には正解がある〉という学び方をすることが多いので、「間違ったらどうしよう」という思いが「答えなければ間違ってもない」という姿勢になってしまうようだ。小学生にも幼児にするように質問をし、思ったことを言葉で言えたら感心してあげると重い口がだんだん軽くなる。

横浜美術館のエントランスにヴェナンツォ・クロチェッティの《平和の若い騎手》の像があったときには、この作品は子どもの鑑賞のスタートになった。幼児にも児童にも「この動物はなんですか?」「乗っている人は男の人?女の人?」「男の人は年齢で、子ども、おにいさん、おじさん、おじいさんっていう呼び方するけど、この人はどれだと思う?」などという質問をしながら、自分の意見を言えるのをほめてあげて鑑賞のスタートを切るのである。その意味では《平和の若い騎手》は子どもにも鑑賞の面白さを体験してもらうための貴重な作品のひとつである。

《平和の若い騎手》を題材とする場合、歴史的に騎馬像の基本は猛々しい馬と騎乗している武将という話をしつつ、なぜ作者は裸馬に裸体の青年にしたのか、ギリシャ神話の神様のぶどうの蔓の冠の話や、作者は見る人に何を言いたかったのかという展開の中で作品名の意味がわかる、というのがこちらの理想的な進め方なのだが、子どもたちの〈好奇心〉や〈聞く力〉や〈受け取った情報の広げ方〉などの能力の育ち方の相違でなかなかそうはいかないが、聞く力のある小学生とは結論まで至ることもある。たいがいは「この馬と青年はどこにいるのだろうか」と場所や風景を想像してもらう展開になるのだが、子どもならではの発想は面白い。《平和の若い騎手》を鑑賞し、その後、希望する小学校を対象に、騎馬像の周辺を消し騎馬像だけを印刷した画用紙を渡して、学校での授業として「馬と青年の周りの風景を想像して描いてみよう」という学校連携をしたことがある。学校によっては風景だけではなく物語を添える作品もでてきた。作品から詩や物語を発想してみるなどという取組みは作品に親しむという意味で可能性があるのではないか。



(fig.1)
馬が頭を下げている様子は「水を飲んでいる」「草を食べている」「虫を見ている」と子どものイメージはふくらむ。

あるとき5年生の男児たちが馬上の人物を「河童」だとはやし立てたことがある。ひとりが放った「河童みたい」という言葉に連動するように面白おかしく「河童」だと。

子どもは初めて出会うものごとを子どもなりに知っていることになぞらえて理解しようとする。特に男児などは「○○みたい」などとアニメやゲームのキャラクターになぞらえて見立てたりする。そのような流れの中での「河童」の見立てとなったようだ。馬上の人物のかぶっている冠が「河童」の髪の毛に見える、という彼らのちょっとふざけの入った見立てに「髪の毛かどうかよく見てごらん」とうながすと、「葉っぱだ」「ぶどうがついている」などと細部を発見する。

子どもは幼いほど自分が知っていることを見立てて「○○みたいだ」と理解しようとする。ぶどうの蔓の冠は「河童の髪の毛」、裸馬と裸体の人物は「原始人」「貧乏だから」と相成る。知っていることで理解しようとする意欲は大事だ。まずは「そう思ったんだ」と認めてあげないと鑑賞は進まない。

さすがに「河童みたい」とはやし立てた5年生たちに「自由に思っている」という終わらせ方をしたくなかったので〈考える〉という話をした。「河童みたいと思ったら、もう河童にしか見えないでしょう」「それを思い込みというんだよ。思い込みというのは考えることをストップしてしまうことなんだ」「はじめて見るものなら『なんだろう?』と思って見てごらん。はじめてでもわかることもある」「なんだろう?って思うことを考えるというんだよ」「思い込んで心を狭くしちゃダメだよ」などというやり取りをしながらその後の鑑賞を進めた。

〈思う〉ということに〈考える〉ということが加わると〈思考〉することができるようになる。これが自問自

答のはじまりだ。

後日、「河童」の5年生たちからお礼の手紙と美術館での活動の感想文が送られてきた。中のひとりがこのようなことを書いてきた。この感想文は現在廃刊になっている子どものアトリエの季刊誌『ピコラマガジン』No.26からの転載である。

感想文「心をせまくしないということは」

私は、最初に見た人と馬の作品を見て、大きくてりっぱな馬だと思いました。それに、子どものアトリエの人の話を聞くと、この馬は自由なんだということがよく分かりました。

それから、アトリエの人がこの作品の題名を考えてみてと言ったけど、なかなか思いつきません。けっきよく思いつかずに終わって、そして思いついたので、発言できなくてとても残念でした。

それから、ちがう部屋にいくと、絵がたくさんありました。その中には日本の絵もあって、人がかいてあったり、庭のようなものがかいてあったりもしました。私は、かいてあるものの少しずつ色がちがうのがすごいと思いました。それと、入っていちばん最初にアトリエの人が説明して下さった絵は、人が何かをなやんでいるように見えました。

最後に、私はアトリエの人のいっていた心をせまくしないということは、絵を見るときだけに大切なことではなく、生きていくためにも大切なことではないかと思いました。

子どもの自意識や能力の開かれ方はいろいろだ。大まかな鑑賞の流れは決めていても、そのときどきの子どもによって接し方は微妙に変わる。この感想文は、子どもたちが展示室で過ごす40分ほどの鑑賞の時間でこんなことを受け取ったのかというひとつの例である。

作品の前で立ち止まる

子どもは心がはずむと体が動き、体が動くとなますます心が動く心身一体が基本態である。ましてや美術館の広い空間では動き回りたい衝動ががまんできない。気になったものは指で指して触ってみたいくなる。壁を触りながら歩いてしまう。気がないと壁に寄りかかってしまう。作品の保全が絶対的使命感の美術館では、子どもは³天敵のような存在だ。しかし、せっかく美術館にきたのに叱られてばかりだと彼らにとって美術館は窮屈な場所と印象づけられる。だからといって好きにしましろう訳にはいかない。それにはほめてもらうとうれしいという子どもの心理を使い、美術館でほめてもらえる過ごし方を教えてあげることだ。幼児などは「静かにできると作品の『ボクを見て』って声が聞こえるよ」「作品がケガをするから触らないでね」「お部屋のまんなかを歩ける？」などだ。小学生になると公共施設としてのルールやマナーとしての話ができる。

子どもたちが展示室で作品の前の床に座って話を聞いている場面を見たことがあるだろうか。あれは「へそと顔を作品にむける」という子どもの鑑賞の基本姿勢で、体を止めて心だけ動かすという心身分離の練習である。幼児などが絵本の読み聞かせや紙芝居などを床に座ってじっと見入り聞き入るのといっしょである。話を聞く、質問に自分の言葉で答えるという〈対話型〉の鑑賞を支えるのが「作品の前にへそと顔をむけて座る」という基本姿勢である。

作品の前にへそと顔をむけて座りながらの鑑賞のやり取りができたら、次は〈作品の前で立ち止まる〉こ



(fig.2)
「へそと顔を作品にむけて座る」鑑賞の様子

との練習だ。小学生の中高学年で落ち着きがあり私たちの指示に従えると判断したときには「自分ひとりで自分の見たい作品を見る」ということをする。条件は、友達といっしょではなく、ひとりで。見たい作品の全体が見えるところまで離れて立つこと。説明文は見ない。これは鑑賞のための姿勢の練習である。

「鑑賞にとっていちばん大切なことは作品の前に立って動かないことだよ。作品にはつくった人の見たものや考えたことや感じたことがエネルギーになって閉じ込められているから、息を凝らして、心を沈めて、作品全部が見える場所に、へそと顔を正面に向けて立つんだよ。するとビビッと何か感じることもある。静かにするってことは、他の人の迷惑だからってこともあるけど、作品のエネルギーを感じられないからね。ビビッと感じたら、どうして感じたのかと考えるんだよ。感じてから考えるのが鑑賞の順番なんだ。感じないときは別の作品の前に立つんだよ」これは自分ひとりで作品を見るときに練習に際しての児童とのやりとりである。相変わらずメモ帳と鉛筆持参の学校がある。「美術を勉強しよう」と力んでしまう学校現場の気持ちも分からなくもない。しかし、学校で訪れる鑑賞の形態は団体であっても、鑑賞の本質はひとりひとりが作品と向かい合うことだということを教えてあげたい。「自分が見ているんだ」ということは、何かを感じていることや感じる部分を自分の中に自覚することであり、自己を認識するうえで大切なことなのである。言い換えれば自分を見つめるために作品を見るのである。作品の前にたたずめると子どもはおとなになる自分に近づけたと私は思う。



(fig.3)
作品の全体が見えるところまで離れて、立ち止まるという練習の様子

前述した『ピコラマガジン』には〈鑑賞の達人になろう〉というコーナーがあって毎号かんたんなコラムを掲載していた。No.26のコラムを転載してみる。

「鑑賞の達人になろう 自分がいて、作品がある」

美術館にはいろいろな作品があるけど、作品が自分で歩いて君に会いにはきてくれないのはあたりまえだね。そう、君が自分で歩いて美術館に来て、そして作品に出会うことが鑑賞の第一歩ってこと。誰も美術館に行けとは命令しないし、どの作品が良い作品だとは教えてくれない。自分がいて、作品があって、見ている君はいろいろなことを考えていることに気づくはず。それが鑑賞だよ。

20年前のコラムであるが、〈自立心〉が鑑賞には必要だと説いている。逆に自立心を養うために鑑賞が役立つと私は考える。

子どもの鑑賞の活動は美術の知識や情報の獲得を優先せずに、それらを知りたくなるような心のコンディション作りと作品に優しい美術館での過ごし方をできるようにしてあげることが大切であるということをもっと教育現場と共有するべきであろう。

(横浜市民ギャラリー主席エデュケーター)

The Manga Works in the Yokohama Civic Art Gallery and the 1978 Yokohama Manga Festival

MORI Mineku

Of the approximately 1,300 works contained in the Yokohama Civic Art Gallery Collection, 76 of them are large cartoons. The single-panel color cartoons, measuring roughly 100-by-70cm in size, and for the most part made by notable artists, are an outstanding part of the collection. In 1978, to celebrate the completion of Odori Park, the gallery presented the Yokohama Manga Festival. The festival was organized by the Odori Park Completion Commemoration Executive Committee. The event, a display of works produced by manga artists and illustrators dealing with subjects such as the history and famous sights in Yokohama, songs, and beginnings, proved to be very popular, attracting a total of 36,725 visitors. The 76 works made by 32 artists were donated to the gallery the day after the festival closed.

Asukata Ichio (1915-1990), who served as mayor of Yokohama from 1963 to 1978, built Odori Park, which links three train stations, Kannai, Isezaki-chojamachi, and Bando-bashi, in an effort to promote the Center City Improvement Project. The park played an important role in the urban planning of the city, and at the time, the Yokohama Civic Art Gallery was located next to the park.

In conjunction with the staff at the City Planning Bureau, illustrator Yanagihara Ryohei (1931-2015) devised the concept of the festival, and enlisted members of the Manga Shudan (Manga Club) to take part in the project. The group was a social club for artists who made manga for adults. Its members included the Yokohama-based manga artist Hisa Kunihiro, who with Yanagihara played a key part in the festival. To encourage the club members' participation, the two men devised a plan to create a work space in one of the gallery's display rooms where the artists could make their works. After they were finished, the artists were treated to a banquet. Thus, the festival was not merely an exhibition, it was also a place where artists gathered and engaged in a friendly rivalry.

Moreover, according to Ishii Toshio, the gallery's chief clerk at the time, the City Planning Bureau approached the gallery regarding the festival, and it was the gallery's first director, Yamada Imaji (1912-1998), who decided to move forward with the event. Yamada was an important cultural advisor to Mayor Asukata as well as being a contemporary poet. Considering that it was not until the '90s that manga exhibitions came to commonplace at Japanese museums, holding an exhibition of this kind and acquiring cartoon works for the gallery collection in the '70s was truly a trailblazing undertaking. This is a clear reflection of Yamada's expansive viewpoint regarding not only art but culture as a whole.

As this explanation suggests, the Yokohama Manga Festival was conceived by Yanagihara and approved by Yamada in conjunction with the city's urban planning project. The works that were produced for the festival might also be seen as a monument commemorating the completion of Odori

Park. They are distinguished by the fact that a number of manga artists were asked to freely make the works and that they were welcomed by the local society. This conveys a sense of the deeply rooted festive spirit in the area. The cartoons that the artists made were site-specific works that could not have been realized anywhere else, making them valuable documents that provide special insight into the area. In addition, the fact that this collection of one-panel cartoons and caricatures (a medium that has greatly declined in popularity due to the rise of story-based manga) has been preserved in a gallery that does not specialize in manga is highly significant. When manga are displayed alongside works from other genres, it accentuates their distinctive characteristics. Manga use humor and emotion to symbolically express a satirical social idea or statement in a single panel. Thus, we might say that the inclusion of the form in the Yokohama Civic Art Gallery added outstanding value to the collection.

(Assistant Educator / Assistant Curator, Yokohama Museum of Art)

How Do Art-appreciation Programs Affect Children?

MITSUYAMA Kazushi

In the West, there is a long tradition of taking school children to see and study actual materials at museums. Not only do the museums organize the materials in an easy-to-understand way, they arrange for a specialist, who can explain things in an interesting way, to guide the students instead of the teacher. These activities are referred to as museum education.

The charter for Metropolitan Museum, the largest museum in the U.S., which was built in 1870 in New York, states that the facility was founded for "...the purpose of establishing and maintaining in said city a Museum and library of art, of encouraging and developing the study of the fine arts, and the application of arts to manufacture and practical life, of advancing the general knowledge of kindred subjects, and, to that end, of furnishing popular instruction." This declaration conveys the idea that the museum is a place for education.

In Japan, children's art appreciation has its roots in junior-high art-history classes. Since, unlike America, there were no museums nearby, there were not many opportunities to come into contact with the actual articles. As a result, studying pictures and explanations about art in a textbook was seen as art appreciation, and it was difficult for students to experience actual art appreciation. Thus, when they later had a chance to visit the museum as an adult, art appreciation became a passive act of looking at a popular work or exhibition.

It was in the 1980s and '90s that museums started to be built all over Japan as a reflection of the country's economic development. As a role model, these museums referred to the American concept of "museum education." Along with the museums, a movement emerged through the country to supplement elementary-school art classes with art appreciation. This provided museums with an opportunity to accept students.

However, because art appreciation had long centered on teaching factual information about the works, the same type of approach was expected at the museum. However, rather than treating art appreciation as a transitory event, it would better to teach children visiting the museum for the first time that this is something that they should continue to practice, and if possible, they should make it a regular part of their lives.

In order to do this, it is essential to provide them with an experience that makes them enjoy thinking about the works they encounter and that leaves them with the feeling that they want to come back to the museum. This makes it necessary to have specialists on hand who can guide the children based on their age and experience. Since the Yokohama Museum of Art opened, the Children's Workshop has overseen these programs.

It is safe to say that organizing art-appreciation programs that have a mental effect on children is the foundation for appreciation as a whole and is equally applicable to the appreciation of contemporary art.

(Chief Educator, Yokohama Civic Art Gallery)

Introducing Documents : Shimomura Kanzan's *Nikki-cho* (Studio Diary)

KASHIWAGI Tomoh

In 2013, the *Shimomura Kanzan Retrospective*, commemorating the 140th anniversary of the artist's birth, was held at the Yokohama Museum of Art (from December 7, 2013 to February 11, 2014). On this occasion, Shimomura's surviving family gifted six volumes of the handwritten artist's studio diary to the museum. Transliterations and annotations on the first volume, *On a Hill* (October 1, 1919 to June 30, 1920), were subsequently published as "Introducing Documents" in the *Bulletin of Yokohama Museum of Art* (issue nos. 16, 17). This issue is contained similar information on the second volume, titled *Studio Diary* (July 1, 1920 to October 20, 1921). The entries from July 1 to October 25 were recorded by the studio houseboy, Irie Tahei, and the remainder were made by Kanzan's third son, Hidetoki Shimomura.

The diary provides a detailed record of studio and family events, including the dispatch and receipt of correspondence, a list of visitors, Kanzan's personal activities (making art, going out), financial accounts. It also seems to have functioned as a reminder of the artist's commissions, appeals for the delivery of works, and requests for authentication notes and appraisals.

Major entries made during this period also provide a record of important works in Kanzan's career. These include *The Sun and the Moon* (Yokohama Museum of Art Collection), a painting that was dedicated on the occasion of Crown Prince Yi Un's (a member of the Korean imperial family) marriage to Princess Masako Nashimoto, an event that was held following Japan's annexation of Korea; *Flowers of Four Seasons*, a folding screen made by special order for the inner shrine of Meiji Shrine in 1918; and *Nanko* (Tokyo National Museum Collection), which was made at the request of Hara Tomitaro (also known as Sankei) and shown in the 8th Revived Japan Art Institute Exhibition.

At the same time, Hidetoki dispassionately recounts a tragedy that befell the family when Kanzan's sixth son, Atsushi, died two months after he was born in the summer of 1921.

(Project Director, Yokohama Museum of Art)

如意輪觀世音(尺八)

聖德太子(尺八)

仁德天皇(尺巾二枚二尺双)

婦去来(尺五ノ双)

拾年八月中出来品

河原の鵜飼(大絹色紙)

楠公(原富太郎氏依頼品三幅対)院展出品画

南山を望む(尺八双幅)

大石良雄(小墨画)

維摩(尺八絹本)

春雨(尺八絹本)

下ノ伯父上持参

下ノ下村へ

下ノ伯父上持参

中島正「元」芳氏へ(丸万堂)

極彩色密画

平山堂主へ 伊藤

義士会

伊藤平山堂主へ

島田友春氏へ

【裏表紙】

〔記事なし〕

【挿入紙片】

尺五寸巾

(寿老)東京日本橋

木下藤次郎

岐阜羽島郡上中島

尺五寸巾

(南山望)野村忠左衛門

【裏表紙内】

〔ラベル貼付〕

12 Tabletten a0.1 G

ザール錠「チバ」

Diallylparbituräure

東京日本橋区本町

発売元 友田合資会社

1.20g

依頼□により、「陶淵明」之図をもつて行かる。下の伯父上、抱一上人筆「富士に龍」之図(覆沙)を返しに来らる。此幅は、すつと以前に祖父様の御望により、下村へ貸し出せしものなり。中村芳泉(越後国鹿峠村鹿峠郵便局御内)より来りし絵絹、真綿等、其俣返還す。絵の依頼なり。真綿にて尺五を画かせる積りなり。不届千万。船室事業婦人後援会へ絵は展覧会に間に合はざる由返事を発す。

拾七日(月曜日) 快晴

山川忠順氏子息二人、用件にて来訪。画室にて暫時、父と面談の後帰宅。松田真一老人、□予て依頼の那智之瀧の図の催促に来る。廣邦精夫氏その伯父坂本武威氏(千葉姉崎町)の画の依頼に来らる。直接坂本氏へ謝絶状を発す。高野某(京都の経師)、「舟子」之れは以前大塚へ渡せし図と思ふを鑑定に来る、本物。野村忠左衛門より、又例の画の催促状来る。

拾八日(水曜日) 快晴

高島屋の番頭、予て依頼の二尺五寸巾の絵を取りに来る。明日取りに来る。早々。野村忠左衛門へ、少々返答の強きものを発す。小島絵絹店(花園町寿)より、註問中之飯卷百本、鉄道便にて着。運賃共、拾三円七拾銭なり。直ちに支払ふ。野末嘉七、先日依頼せし小点物とかの催促に来る。

拾九日(水曜日) 快晴

藤田青花氏、美法君と同道。宮川長春筆三尺巾の浮世絵(肉筆)持参。吉谷とか云ふ人の所有。黒須廣吉氏来訪。田中良助氏の印□をもらいに来訪。母と

面談帰宅。

○高島屋ノ番頭、予て依頼の秋の画題の展覧会に出品すべき画を取りに来る「初冬」と題する三尺五寸巾の大物一幅渡す。図は錦木の頂に百舌鳥がさへずり下の方に白菊の二三株見ゆるもの。

廿日(木曜日) 晴後曇

昨日、藤田氏持参の長春筆大幅、四百円にて手に入る。青花氏、その持主なる吉谷とか云ふ人と来る。高山徳氏(横浜根岸の人)の家人太田鐵次郎氏の使用として、□端溪の大硯(珍品)持参。太田伯父上の知人の所有なるも買つてもらい度き所存ならん。唯、観覧に供し度しと云ふ。木下藤次郎氏来訪。依頼画は明後日あたり送る可しと約す。石原春秋氏来訪、画室にて父と談後帰る。

拾年拾月中ノ揮毫品

陶淵明

(尺八絹本)

城数馬氏へ

初冬(錦木二百舌鳥)

(三尺五寸巾)

高嶋屋美術部へ

鶉飼

(尺八絹本)

南米岳へ

風竹(月夜ノ竹)

小点物

三浦梧堂へ

富岳と日の出

(横物)

城数馬氏へ

磯の朝(日の出之図)

尺五絹本

いとう呉服店(登屋)

寿老

尺五絹本

木下藤次郎

南山を望む

尺五絹本

野村忠左衛門

拾一月中出来品

拾年七月中出来品

廿九日(木曜日)曇

内藤清なる者、島田友春氏に先頃揮毫し遣し「春雨之図」箱書付にて持参。鑑定請はり。□小川市太郎(品川の)、尺五、絹本(三百円預り)の催促に来る。

大正拾年拾月

一日より十日迄、小生留守にて万事章兄執事す。留守中「二日頃」、千住の岩崎(櫻組)氏令息を同道にて知人、町田実柄氏及町田豊千代氏の依頼画を催促に来る。

町田実柄氏分 金五百円也預 秋色の景色 尺五 一。

町田豊千代氏分 金一仟円也預 淡彩山水 尺八 一。

◇ 金五百円也預 秋色花鳥 尺五 一。

以上三幅 絶対無期日にて承諾。

「拾一日」火曜日 久方振の晴天

君島庄三郎(表具師 京都市麩屋「町」通二条北入)より、松茸一籠着。美術時報社記者(平岡鐵男)なる者、同社の記念製作なる画帖の依頼に来る。色紙(金色紙本裏箔)二枚、置き行く。絶対無期間にて承諾。諸井怕平氏、招介(マ)の木村松三郎氏(新潟県長岡市内町一丁目、東京宿所 本郷区根津西須賀町十六)、尺八の依頼に来る。期間は来月十日迄とか。不止得不得止引受。此の絵は、静岡の和田豊治氏へ贈呈せる、ものなりとか。

拾二日(水曜日) 晴

関口梅水(日本橋区橋町三丁目拾番地)の使、先日留守中、母の受付けし二尺

巾箱書「寿老之図」の出来に取りに来る。渡す。泰文社美術店の使、故菱田春草氏の落葉之図(観山箱書、武山再鑑)再鑑に持参。君島庄三郎氏へ松茸の礼状を出す。楠八十兵衛氏(深川区吉永町二番地)より、泰文社より求めし春草筆落葉之図に付、□証明書依頼の為往復端書を寄越す。即時返信す。

拾三日(木曜日) 曇後雨 冷氣甚たし

奥田彌生(大阪市西区北堀口御池通一丁目十三番地)より、松茸一籠、着。佐藤一法氏、例の件にて応接間に父と面談す。宮永平山氏より、「シモノエ」イソグ「イッデキルへ」との電報、着。直ちに「エデキシダイオクル シモムラ」と変電す。

拾四日(金曜日) 晴

馬場新逸氏(横浜市太田町四丁目六番地伊東屋敷館内)、同旅館の依頼せる「日出」の画、箱書取りに来る。渡す。奥田彌生氏に礼状を發す。此の人に対しては、最早用済なり。

拾五日(土曜日) 晴

鯨井吉三郎(本郷区森川町一番地)表具師、箱書「寒山拾得」持参。青木百太郎(埼玉県菖蒲町)へ鑑定物「横臥梅」図返送す。偽物。松嶋勝之助、予て依頼の色紙の催促に来る。本月廿五日迄に願ひ度しと、大粒林檎拾一個持参。

拾六日(日曜日) 晴

○城教馬氏(備外)(朝鮮覆法院長)来訪。画室にて父と面談の末帰らる。同氏知人の

拾二日(月曜日) 雨

横山助一氏へ礼状を出す。島田友春氏来訪。河田氏(三溪園)来訪。

拾九日(雨後晴)
弟豊と院展見物。帰浜。

拾三日(火曜日) 雨

三溪園より、柿本寺、及多武峯寺の軸二点を持参。しばらく貸与すること。
仏像研究会の連中、松田福一郎氏を初め、井澤蘇水、藤田青花、御明亀五郎、入江美法氏等来訪。井上徳三氏、画室にて応接。

廿日(晴)

御明亀五郎氏並に藤田青花氏等、不動尊参観。父と面談後帰宅。金田傳兵衛氏使、佐藤一法氏来訪。画室にて父と面談帰宅。

拾四日(水曜日) 雨

佐藤一法氏(鏡谷氏の隣)、金田傳兵衛、小澤八五郎、寺の件に付、画室にて父と面談の末、年内に尺八五枚画く事を決る。新井四郎吉、箱書二点(浅野氏□「所」有)持参。

廿一日(晴) 水曜日
怱井(洪井)氏夫妻□、野口弘毅氏同伴来訪。

拾五日(木曜日) 雨

○島田友春氏へ、尺八、絹本、画題「春雨」二幅、書留小包郵便にて送る。乾南陽氏来訪。義士会依頼の小点物「大石良雄」一点、及半打三枚持行かる。

廿二日(晴後曇雨) 木曜日
南米岳、及野村忠左エ門へ延引詫状体のもの出す。もつとも、南米岳には半折一幅遣るつもりあり。島田友春氏より、芋一俵(拾一貫)、着。上品なり。

拾六日(金曜日)——廿日(火曜日)此間殆ど雨天
此間特筆すべき事もなし。

廿三日(雨) 金曜日

廿四日(土曜日) 雨

廿五日(日曜日) 雨

拾八日(雨)

元吉君と二科展及院展見物。

六男純(アツシ)、遂に午後八時十五分永眠す。
廿七日(火曜日)、会相澤火葬場にて火葬。

廿九日(木曜日)、谷中安立寺にて本葬の段取。

卅日(火曜日) 雨

丸山義人(信州南安曇郡三田村)より、父筆楊柳観音(紙本半折)、箱書の為送り来る。実業之日本社(京橋区南鍋町二ノ拾五)より、婦人展世界主催の女流展覧会の顧問となりし礼状着。

卅一日(水曜日) 曇

格別のこともなし。原富太郎氏へ父の今回院展出品画、楠公(尺八絹本三幅対)の原色版持参す。

大正拾年九月中日記

一日(木曜日) 晴

院展招待日に付、父、東京に出懸く。

二日(金曜日) 晴後曇

格別の事もなし。

三日(土曜日) 晴天

東宮御帰朝記念日。

四日(日曜日) 晴後雷雨

夕方、東京へ行く。

五日(月曜日) 雨後晴

渡貫当君と院展を観る。

六日(火曜日) 雨

平山堂「主」来訪。「南山を望む」の図(尺八絹本双幅)を渡す。

七日(水曜日) 雨

平山堂主来訪。画室にて父と面談の末帰る。横山助一氏より、同氏祖父筆、扇面一本着。

八日(木曜日) 曇風雨後晴

南声鳳よりおどかし状、又来る。返事やらず。船室事業婦人後援会へ依頼画は又暫く待たれ度きむね返事す。

九日(金曜日) 雨

格別のこともなし。

拾日(土曜日) 晴

石原春秋、児玉□素行、牧いく(同じくその子)、真船先生等来訪。松本政成氏へ林檎の礼状を出す。

拾一日(日曜日) 曇

格別のこともなし。

二十拾日(土曜日) 晴
午後、妹二人を連れて東京の伯母上宅へ行く。

廿一日(日曜日) 晴
格別のことなし。

廿二日(月曜日) 晴
不明。

廿三日(火曜日)

島田友春氏来訪。画室にて父と面談の末帰る。澤松溪氏、展観の事に付来訪。

石津東耕氏(直江津久)来訪。

廿四日(水曜日) 晴
変りなし。

廿五日(木曜日) 晴

牧内元太郎(横浜毎朝新報社々長)、東宮殿下御帰朝紀念と称し、絵の依頼をなす。絵絹を無理に措いて行く。預る。林代蔵より、小切手にて金一百円也を送り来る。

廿六日(金曜日) 晴後風雨

鹿沼庄八氏(東京市麴町区三丁目十九)より金七円也(郵便為替)、封入にて、

父及廣業氏等三人の合作席画(前に太田吉松氏所有)を箱書依頼の為送り来る。笠井栄一氏(四日市市丸池)より、金二円也(小為替)封入にて箱書依頼の為、扇子(箱入、父の若書にて草花二二本乱れ咲く物)を送り来る。増田義一氏より、予て依頼ありし実業之日本社主催婦人展覧会の顧問たることを快諾せるに對し礼状を寄せらる。宮永東山氏後援会の賛助員「たること」を父より依頼し置きし洪沢栄一氏より、断り状着。早速、此由、宮永氏に通知す。林代蔵氏に對し先日送り来りし追加金と称する金、金一百円也(銀行小切手)を手紙封入にて返還す。本日、父上院展出品画監査の為会場に趣く。先年、洋画部脱退にも拘らず、尚百点に近き般入ぼん入を見たりと云ふ。同人連は之をも審査せりと。

廿七日(土曜日) 大風後晴

宮永東山氏へ洪沢栄一氏より着せし断り状に添手紙をして発信す。

廿八日(日曜日) 風後曇 非常に涼し

藤本松華堂(東京市牛込区榎町一八)主より、雅邦先生筆(観山箱書付)鑑定を請ひて送り来る。真筆。

廿九日(月曜日) 雨

藤本松華堂へ鑑定物、返送す(書留にて)。鹿沼庄八氏に對し箱書返送す(シ)。笠井栄一氏へ扇面箱書出来に付、書留便にて返送す。

八日(月曜日) 晴

黒須廣吉氏、画室に父と面談。数時後帰宅。

九日(火曜日) 晴 暑熱甚し

夕刻、市川氏老母来訪。

拾日(水曜日) 晴

格別のこともなし。

拾一日(木曜日) 晴

格別のこともなし。

拾二日(金曜日) 晴

青山の西村なる者、箱書持参。席画(松日出)。

拾三日(土曜日) 晴

川口識三郎氏より桃一箱着。礼状出す。中島元芳(日本橋区浜町二ノ一三)の色紙出来。

拾四日(日曜日) 晴

宮越正治氏より麦酒三箱着。礼状出す。

拾五日(月曜日) 曇後雨

下の伯父上、南紀美術会の会員と称する者を連れて来らる。多分出品画の下絵のことならん。

拾六日(火曜日) 雨

中島元芳氏へ予て依頼の色紙渡す。図は湖辺の鵜飼。

木下藤次郎氏、予て依頼せし尺五は九月初旬迄とのこと。安住伊三郎氏(堀丹青堂の紹介人)より、防蟲剤、沢山送付し来る。

拾七日(水曜日) 雨

加奈陀サン生命保険会社へ、本年分払込金(但し前五ヶ年間の配当を差引)を辛酉銀行の小切手にて支払ふ。野村忠左衛門へ本月内には出来せざる可しとの通知状を發す。乾南陽氏へ卅日の来訪を後一週間程、延引せられ度しという手紙を發す。安住伊三郎氏礼状を出す。

拾八日(木曜日) 雨後晴

宮永東山氏来訪。京都「近江長濱」の下郷氏の依頼画を依頼せらる。不得止、引受。金一仟円也。揮毫料として預る。

拾九日(金曜日) 雨

加奈陀サン生命保険会社より、振込金の受取書来る。平林大虚、下絵をの校閱を請ひに来る。

廿七日(水曜日)雨曇

田町より、産婦見舞として菓子二折送り来る。加奈陀サン生命保険会社へ対して引続き加入するむね通達す。

廿八日(木曜日)晴

坂間順太郎氏、画の催促に来る。本年内には是非とのこと。

廿九日(金曜日)晴

児玉天来氏、橋本永邦、両氏来訪。画室にて父と面談の末帰らる。

卅日(土曜日)晴

京橋の丸万堂主、色紙の催促に来る。

卅一日(日曜日)晴後雨

格別の事もなし。

(二行記事なし)

八月中の日記

一日(月曜日)晴

橋本永邦氏へ、キナ皮一箱、及稀塩酸一壺送る。久し振りにて石原の老母来る。

夜、父、同人の相談会にて錦水に行く。

二日(火曜日)曇後雨

島田友春氏来訪。乾南陽氏来訪。

三日(水曜日)雨

夕刻、前田青邨氏来訪。

四日(木曜日)晴

林の伯母上、病院に時春兄を見舞まわる。高橋初郎氏、平尾賛平氏の箱書の事にて来訪。

五日(金曜日)晴

南米岳の妻君、半打[▽]催促かたがた産婦の見舞品として白布少量持参。横浜毎朝新報社(横浜市南仲通四ノ七三)より、絵絹らしき物送り来る。十合呉服店美術部(京都市四条烏丸)より、寸法随意にて絵を依頼し来る。三浦梧堂(京都市河原町四条上ル)より、至急依頼画の揮毫を願ひ度しとの手紙来る。

六日(土曜日)晴 非常に暑し

三浦梧堂へ反抗的なる返事を出して遣る。十合美術部へ依頼の拒絶状を出す。

七日(日曜日)晴

本牧神社祭礼。西川大六の使、依頼画の問い直しに来る。野末嘉七(北品川)、箱書持参。寺内新太郎君来訪。永井氏より礼状来たる。

十六日(土曜日)晴 微風

林良吉君来訪。小倉文彦氏(児玉素行氏の紹介なる)、福田勇氏(朝陽社主幹)を代人として、予て依頼の尺八、絹本、四幅対の催促に来る。此の依頼は、父が児玉氏より引受けたるものなり。絹(四幅対分)福田氏より預る。期間不定。

七日(日曜日) 晴 微風

良吉君、章兄等と海水浴にテニスで終日を過す。

十八日(月曜日) 晴 微風

島田友春氏、午前八時頃来訪。午前七時拾五分頃、第六男、此世に出づ。体重一貫五百匁ありたり。

十九日(火曜日) 晴

格別のことなし。

廿日(水曜日) 晴

高橋初郎氏、書中見舞に来訪。荒井寛方氏使、上山良吉氏、依頼画のことに付来訪。揮毫料として金一仟円也確持参す。右依頼品は森村氏が長與氏に、長與氏が瀧精一氏に、瀧氏が荒井氏に、揮毫方手続を依経^{ヨシ}し、以て当方に依頼せしものなり。現に金一仟円也は森村氏のものなり。

廿一日(木曜日) 晴

松田の使、鑑定物持参。右は春草筆、弁財天女。箱書は観山筆。両者真筆。

廿二日(金曜日)晴後曇

稲垣氏(銀座の質屋)より、観山筆、瀑布の図、箱書に来る。午後、東京へ買物がたら林伯母宅へ寄る。

廿三日(土曜日) 雨

留守中、岐阜の林代蔵、依頼画の催促に来る。二百円預るとのこと(これも画室にその証拠たる手紙ある也)。談判の結果、無期間にして画題寸法は当方の自由たることとなる。

廿四日(日曜日) 雨

長谷京吉氏使、箱書二幅持参。図に木瓜、及び舟上の禪僧なり。

廿五日(月曜日) 雨

格別のこともなし。出産届を市役所へ出す。

廿六日(火曜日)雨後晴

赤ん坊を渡辺義郎医士へつれ行き、瘤の切る可きや否やをきく。二三カ月後がよろしきよし申さる。

一幅)、本日、全部疑なきものなりしとの手紙を添へて返す。

六日(水曜日)快晴

松田眞一氏使、御中元に来る。

七日(木曜日)快晴 風

中川忠順氏来訪。画室にて父と面談。井上徳三氏、中元の挨拶を兼ね依頼画の催促に来る。島田友春氏、中元進物、及仏像撰集画巻一巻、御持参。

八日(金曜日)曇強風後雨

平山堂主伊藤平蔵氏、観心寺に関する書一卷持参。預る(□)〔篠〕崎小竹筆詩)。

九日(土曜日)雨

別に変った事もなし。

十日(日曜日)雨後晴 強風

奥田芳彦氏より、正信筆の画幅送り度き由云ひ来る。放任。東京講武所(東京本郷区追分町拾番地)より、紀念展覽会に出品すべき画の依頼を致し来る。又絹も送り来る。豊嶋俊文氏(大阪市北区若松町八子番廷)より、なき)とを云ひ来る。

十一日(月曜日)晴 強風

本日、安立寺へ御附届持参。田町の伯父宅へ御中元持参。林御伯母上宅へ立

ち寄る。黒須廣吉氏、兼て依頼の箱□書を取りに来らる。取築僧諸代の筆、御持参。預る。長井利右衛門氏より、御中元として焙茶一罐着。

十二日(火曜日)晴 風

寺内銀二郎氏来訪。画室にて父と面談。長井利右衛門氏へ御中元の礼状を出す。

東京講武所(本郷追分町)へ絵絹、返還(普通便にて)。田町の伯父上宅へ礼状を出す。

十三日(水曜日)曇

船員事業婦人講演会幹事なるもの、兩人にて来訪。同会主催の展覧会出品の揮毫品、依頼成す。止む得ず引受けたり。栗山徳三郎氏来訪。

拾四日(木曜日)曇

高林清之(金沢市十三間町十九番地)より、御中元として土産、長生殿を送り来る。木村久雄氏(大久保間八町「二二八」)より、御中元として「有松」紋染一反、送り来る。林の御伯母上より、時春兄の事に付来信。明日、宮永東山氏来訪の由電話にて申し来る。

拾五日(金曜日)晴

宮永東山氏来訪。画室にて父としばらく面談の末帰宅せらる。

(二行記事なし)

〔二十九日 月曜日 晴

西川大六の使、山口なるもの、依頼画の催促に来る。返事する必要なしのこと。大塚源太郎及松嶋勝之助兩人、例の川鉄の件にて来訪。万事、小田の伯父上に応接を御願す。近々、詫状を以て、一切事件、温和に解決すること、す。

廿二日 火曜日 曇後雨

格別の事なし。三浦梧堂(小点物)、依頼画の催促に来る。

廿二日 水曜日 雨後晴

変たることもなし。

二十三日(木曜日)快晴

横山時彦(現代之美術社長)、去年四月、依頼せし依頼画、不必要に付揮毫料返還方申越し来れば、直時、金五百円也、主人に渡す。受取依頼帳に在り。

二十四日―二十七日 林の伯母上宅の滞留中。

二十九日(水曜日) 強雨

西巻稲村(根津片町)、五浦時代依頼の画帖、催促状を寄す。出鼻を把られざる様な返事を出す。

卅日(木曜日)雨後烈風

松嶋勝之助より、詫状来る。保留。

以下大正拾年七月分

一日(金曜日)曇 強風

横浜開港記念日。早朝より花火を打ち上ぐ。荒井寛方氏(上根岸八二番地)より、大学教授長與氏の依頼による画の引受如何の問合せ状来る。「期間不定なれば」の条件にて引受けたり。

二日(土曜日)雨後晴風

格別のこともなし。

三日(日曜日)晴

本月一日より、扇風機を通ず可きに何等見廻はらざれば勝手に接続す。先月より手伝を御願ひして居た林伯母上、本日御法事の為帰宅せらる。午後、鶴殿長庚氏、西郷南洲翁の筆と伝ふる物を売りに来らる。直ちに返還する筈。

四日(月曜日)快晴

横浜火災保険株式会社より、引続き契約せられたしとの通知来る。満期は七月九日とのこと。

五日(火曜日) 快晴

小林正月氏依頼の鑑定物三幅(明画 一、応拳の花鳥まくり 一、英一蝶筆、

八日(水曜日)曇

美草屋美術部へ箱書、返送(書留便)。米栄旅館へ三五みかんの礼状を出す。

九日(木曜日)晴

別に変ったこともなし。

十日(金曜日)曇

〔下村〕原の伯父上、伯母上、来訪。夜、貢君、美法君、多平君、信三郎君、及章兄等と共に横浜青年会館に西欧名画写真展覧会を觀に行く。夕刻、伊藤氏夫人、箱書の礼に来訪。

十一日(土曜日)雨

本日より、梅雨。早朝より、章兄と共に横浜青年会館の複製写真展覧会の第一二目を觀に行く。希臘彫刻(瀨死のゴール人)、ラハアエルの提琴家、及ダベンチのBeatrice d'estの三点を買求む。全部、部屋に懸けたる後、父に批評を請ひし時、提琴家はラハアエルの若年時代の自画像ならんと、又瀨死のゴール人は、希臘彫刻中最も自由なる作としてよきものなることを云はれたり。

十二日(日曜日)曇

乾南陽氏、色々半打二枚(之の揮毫料として、金二百円持参)、及義士会の依頼品たる小点物(絵絹及枠は同氏御持参、又揮毫料として一百伍拾円也、現金にて持参せらる)、一枚の依頼に来訪。審美画会より、西郷孤月筆、山水双幅之図、箱書に来る。直ちに出来。

十三日(月曜日)雨後晴

夜、又写真展覧会に趣き、Albrecht Durerの拾三歳の自画像、一枚求めて帰る。

十四日(火曜日)雨後晴

京橋楠沼氏の友なる木下藤次郎氏来訪。画の催促なり。

拾五日 水曜日 雨後晴

終日何事も起らず。

拾六日 木曜日 晴

指して変りたることも起らず。

拾七日 金曜日 晴後曇

柴崎五十二(弁護士、法学士)なるもの、例の大塚源太郎及川嶋鐵之助の件に付、調査に来る

拾七〔八〕 土曜日 雨

格別のことなし

拾九日 日曜日 雨

終日読書で暮す。変なし

大正十年五月分

一日(日曜日)晴

父上、洪澤子爵邸の園遊会に出席す。遠藤観伸氏(神田南甲賀町拾八番地)、絵の依頼に来る、謝絶す。先年千葉より、大盆栽を贈り来りし人なり。昨日は久方振りにて渡邊の伯母上、林の伯母上、千代子等と共に来らる。

二日(月曜日)曇後晴

午後、南米岳氏、及外一人、古画数点持参す。

三日(火曜日)晴

小生、上野の博物館に於ける高野山の宝物展覧会を見に趣く。父の二十五菩薩来迎図の写しを展覧窓に見受けたり。

以上、無記入の部は、暗記或は手帖の備忘録欄中に記入せるもの知る可し

以下必録 大正十年六月一日

(欄外)
六月

一日(水曜日)風雨

別に変ったこともなし。

二日(木曜日)雨後風

美草屋美術部(名古屋市中区矢崎町一ノ切)より、父の若書き鳩の図(尺八紙

本水墨画)箱書依頼の為送り来る。午後、東京会の田中良助、画会の出品画依頼に来る。万事手紙にて返答することゝす。

三日(金曜日)晴

別に指したる重要なこともなし。

四日(土曜日)晴

田中良助より、展覧会の出品画揮毫料として無理推し付に金一仟円也、為替にて送り来る。直ちに返還す。徳島の中村潘多(先月雅邦先生の三幅対の箱書を依頼し来りし者)、玉堂の紹介状の返還依頼に来る。直ちに送附しやる。余、東京に趣く。戸崎町の伯母の宅へ厄介になる。

五日(日曜日)曇むしあつき日なりき

福三郎、音菊主婦及他に女一人来訪。父面会す。余、上野竹ノ台に東台彫塑会第一回展覧会を観る。小倉右一郎氏の傑作大部をしめ居たり。

六日(月曜日)雨

井上「口」庄藏、川端龍子及常磐楼主 大塚榭太郎来訪。画室にて父と面談の後帰宅す。余、東京の稲垣商店へ箱書を持参す。後、戸崎町に泊る。

七日(火曜日)曇

上野博物館に仏像・石器時代遺物、及支那、古朝鮮土器を見る。何時に倍し明らかなる日なりき。

十二月三十日(木曜日)晴

伊藤四郎右衛門氏より、年末年始欠礼の通知来。尾川昭純氏より、年末年始欠礼の通知来る。

十二月三十一日(金曜日)雪後晴

高島屋呉服店美術部より、二十五日発送の新年の画及還暦画帳其の礼として金一任円小切手にて来る。直ちに受取を出す。両国回漕店横浜出張所横浜市山吹町二ノ四より、田中喜兵衛氏より送り来りし醬油一樽を至急引取られ度しとの手紙着。年末年始欠礼の通知、小倉文彦氏(千葉県山武郡東金町)より来る。乙部、田中、竹田三氏へ礼状を發す。

(大正九年度終了)

大正十年度

一月元旦(土曜日)晴

一月六日(晴)

△母、朝十一時頃より松澤病院へ。

△高田早苗氏書生、奥田義彦氏来訪し、昨二日に約せし小画帖に付き、叔父山田政三氏と問答の末、昨該者は昨年の絵に對しては、第二、即ち全然異なりたる問題なりとし、一先づ該物を返送し揮毫を拒絶すること、す(注意、昨「明」日は該画帖をさがさざる可らず)。

△母、夜十時頃帰宅、弟豊を戸崎町の林家より同伴。

一月七日(晴)

△齋藤隆三氏書生、箱書持参預る。尺八、達磨之図、極最近之作。

△高槻氏、年始に来る。

△高島屋□呉服店美術部高橋初郎氏来る。色紙二枚を依頼、又金セン紙(ニ)ム粉製(てふ近頃製造せられし紙に試筆されたし)とて持参、計三枚、兎に角預る。

△夕、林元吉君帰京。竹田文吉氏へ酒樽の礼状。金閣寺に納豆の礼状。妹尾春太郎氏へ揮毫四五日延期の頼状。

大正十年二月の日記

一日(火曜日)晴

乾南陽氏より、土佐鯛の干物鉄道便にて着、發送地 高知市本町大住病院。前田兼寶氏(宮城県警察部長官舎)より、鮎の案内状着。

二日(水曜日)晴

乾南陽氏より、干物の案内状着。直ちに礼状を發す。前田讓、阪野五兵衛氏より、渡辺氏紹介の画を催促し来る。渡辺千代次氏(五浦)より、税金の書付沢山着。日本美術部院より、同人會議の通知書来る。

(欄外)以上記入

ナキモノハ暗

記セルモノナリ

〔欄外〕
スミ矢口政次郎氏より、公魚の箱結箱。

〔欄外〕
スミ小林正月氏より、鑑定物持参送り来る。金五拾銭同封。午後、小生、帰宅。直ちに鳥小屋の造築に取掛る。

〔欄外〕
○スミ/夕刻、石原氏宅へ栗林氏の依頼画(尺八絹本一、図題醉李白)、溝口楨次郎氏より、近々絹張りの屏風一双発送すべしとの手紙着。堀江いそ氏より、久保田氏の「●」絵の催促状着。

〔欄外〕
スミ田中良助氏より、礼金の少量なりし詫状着。

〔欄外〕
スミ橋本秀二郎氏より、屏風出来の礼状着。

十二月二十七日(月曜日) 晴風強し。

乙部喜兵衛氏より、菜漬の案内状着。宮川大壽氏より、例のおどかし文句の手紙(葉書の書留)着。発信地は、静岡県富士郡吉原町鯛屋旅館。

〔欄外〕
スミ日本美術院より、新年宴会の通知書来る。一月二日午前十時よりとのこと。小林文七氏(浅草区駒形町七番地)より、例会の招待状着。

〔欄外〕
スミ竹田文吉氏より、近々酒樽を送るべしとの手紙着。

〔欄外〕
スミ日本美術院より、クリーブランド出品画の用品、鉄道便にて着。関如来氏使、同氏の手紙(例の「○」画の催促)持参。出来次第通知の約。

〔欄外〕
スミ御明亀五郎氏(奈良氏中新屋町)より、春日厨子、鉄道便にて着。運賃十八円四拾銭。井上徳三氏、予て依頼の井上氏親族の「●」画の催促に来訪。

〔欄外〕
スミ長井利右衛門氏へ歳暮の礼状を出す。

〔欄外〕
スミ目黒十郎氏へ十九日着の梨の礼状を発送す。

〔欄外〕
スミ矢口政次郎氏へ公魚の礼状を出す。

〔欄外〕
スミ小林正月氏へ鑑定物(尺五絹本?一幅、松に鶴の図探幽齋筆とあり、大

偽物)を返送。田口掬汀氏より、年頭欠礼の通知状着。

十二月二十八日(火曜日) 晴後強風

松島勝之助氏(静岡県焼津町)より、密柑ミカン一箱、鉄道便にて着。直ちに礼状を出す。中畑米次郎氏(飛騨吉城郡上室村)より、わさび及ねぎの案内状着。朝松組運送店より、先月六日、渡辺喜四郎氏より、来りし荷物の運賃過剰高、金五拾銭を返済に来る。受取を渡す。宮川大壽氏へ依頼画出来の通知を発送。南治五郎氏(巽画会本部東京下谷区竹町二七)へ依頼画出来の通知を発送。兵藤祐三郎(茨城県新治郡志筑村長)氏より、記念画揮毫給はり度しとて小切の紙同封し来る。放任。

十二月二十九日(水曜日) 晴

榎本恭三氏(相州箱根小涌谷)より、山芋一箱鉄道便にて着。直ちに礼状を出す。中畑米次郎氏(飛騨国吉城郡上室村)より、わさび、及ねぎ一箱着。直ちに礼状を出す。木下運輸店(東海道線住吉駅前、兵庫県武庫郡灘住吉村)より、竹田文吉氏発送の酒樽の荷引換書来る。島田友春氏より近々栗漬着す由云ひ来る。山田中氏(英京在)より年始状着。大和絵刊行会より、病の草紙一卷着。溝口楨次郎氏より、御風呂先屏風着。御明亀五郎氏へ奈良左右田銀行支店の小切手(二百八拾円)を書留便にて着発送。母、市川老姥宅へ、画(尺五絹本一、水黒の竹)を持参。乙部喜兵衛氏より、なづけ一樽鉄道便にて着。南治五郎氏使へ画(尺五絹本一幅、水黒の竹)を渡す。

〔欄外〕
スミ林の伯母上宅へ、梨一箱發送。横浜稅務署より、營業稅調查通知狀着。

近々、返事を出す筈。

〔欄外〕
スミ本日、父、伊豫紋の同人会、兼忘年会へ出席す。

十二月二十三日(木曜日)晴

本日も前日に引続き、建造に終日「を」費す。

〔欄外〕
スミ井上徳三氏使、手紙持參。至急「〇」画を願ひ度しとのこと。

〔欄外〕
スミ中野貫一氏(新潟県中蒲原郡金澤津)より、年末年賀の礼を欠く由通知来る。

〔欄外〕
〇スミ井上徳三氏使へ画を渡す。横物、絹本、図題、朝陽。

〔欄外〕
スミ江波医院會計部(東京市本郷春木町二ノ二九)より、大正八年一月より六月迄の父の葉代、請求し来る。母の云ふに全く支払ひしものなりと云ふ。放任々々。

十二月二十四日(金曜日)晴

〔欄外〕
スミ三越呉服店美術部より、残りの金屏風一雙取りに来る。

〔欄外〕
スミ伊東(本牧町)氏より、歳暮持參。

〔欄外〕
スミ常磐(本郷弥生町)より、父の寒山拾得(尺八双幅)箱書の為持參。

〔欄外〕
スミ下山儀三郎氏(東京市麹町区元園町)より、年末年始の礼を欠く由通知来る。奥田芳彦氏より、「〇」画帳の催促狀着。

〔欄外〕
スミ宮内省本金庫(東京市京橋区木挽町七丁目六番地、株式会社十五銀行)より、小切手にて百円着。

十二月二十五日(土曜日)晴

〔欄外〕
スミ寺内銀次郎氏使、歳暮持參。関如来氏より、「〇」画の催促狀着。放任々々。

〔欄外〕
スミ林伯母上より、手紙着。別に大した用事もなし。

〔欄外〕
スミ日本美術院より、近々クリーブランド博物館巡廻展覽会出品用画絹、發送すべしとの通知、及出品規定着。妹尾春太郎氏より、「●」画の催促狀着。近々發送の約束なりしなり。

〔欄外〕
スミ矢口政次郎氏(茨城県新治郡田舎村高崎)より、公魚「ワカサギの送状」一箱着。

〔欄外〕
スミ井上一郎氏(東京市四谷区南町山田方)、無理押附けの画の依頼の手紙を寄す。後に本人絵絹を持參し来り、無理に預け去らんとするを謝絶し歸す。

〔欄外〕
スミ夕刻、林の伯母の宅に至り宿泊。

〔欄外〕
スミ松田亀七氏使、鑑定物(春草筆、紙本半打「一枚」、図は雌鶏、及箱書(父筆、尺八絹本、図題山麓)持參。

〔欄外〕
〇スミノ大阪高島呉服店へ、横物、絹本、一幅、図題、和歌の浦を「書留便にて」發送す。田中喜兵衛氏(千葉県下総市川町)より、醬油樽の發送通知着。

十二月二十六日(日曜日)晴天

〔欄外〕
スミ津田藤太郎氏、歳暮持參。

〔欄外〕
スミ堀喜二氏(濱寺)來訪。画室にて父としばし面談の末歸る。

〔欄外〕
スミ小生、林良吉、元吉二君と共に上野に向ふ。途中渡辺宅へ歳暮持參。

〔欄外〕
〇スミ北上氏へ(尺八、絹本一、図題、水墨の月に竹)を持參。
〔欄外〕
スミ下村の伯父、本月十七日渡せし尺五、三幅対、及尺八一幅の半金として、金七百五拾円持參。

○^(欄外)スミ下の下村へ、尺五、絹本、三幅対、図題、菅公、及尺八、絹本、一幅、
図題、朝陽、章兄持参。

十二月十八日(土曜日)雨

^(欄外)スミ林数之助氏、雨之題の画、催促に来る。又同氏より、美術院同人、高野
紀行記念展覧会の目録着。

十二月十九日(日曜日)晴

^(欄外)スミ南米岳氏使、箱書に来る。図は醉李白、二尺幅、絹本、真物。

○^(欄外)スミノ松田氏使、色紙を取りに「来る」。持ち帰る。

^(欄外)スミ松本正成氏(新潟、^{ママ}県下高井郡倭村柳澤)より、林檎一箱鉄道便にて着。

^(欄外)スミ入江富年氏より、白菜一包着。直ちに礼状を出す。

^(欄外)スミ高橋初郎氏より、明初春大阪店にてなす会の「○」出品画幅(尺八)一枚、
是非年内に願ひ度しと云ひ来る。小宮半四郎氏より、還暦「○」画帖の催促状

着。松澤病院より、一月分の入院料の通知状着。二十六日迄納め願度しと。
横山助一氏より、何か祖父の米寿記念に画き下れと云ひ来る。断謝のつもり。

(二十日の記事に廻す)。

^(欄外)スミ目黒十郎氏(新潟県長岡市表四之町)より、梨一箱着。

十二月二十日(月曜日)晴

^(欄外)スミ三越美術部より、電報にて画の発送問合せ来る。市川の老母、画の「○」

催促に来訪。

^(欄外)スミ三越へ電話にて屏風出来、及荷造出来の通知をなす。

^(欄外)スミ島田友春氏来訪。画室にて父と面談未帰宅。金一仟円確に手渡しす。裏
の物置脇へ鳥小屋の建築を初む。

^(欄外)スミ日本興業銀行へ領収証を発送す。

十二月二十一日(火曜日)晴

本日も章兄と早朝より鳥小屋の建築に努力す。

^(欄外)スミ義士会の使、来り何か是非揮毫給はり度しと云ふ。断謝す。

^(欄外)スミ下村早之進氏夫人来訪。

^(欄外)スミ藤田氏来訪。研究会一同の歳暮持参。

^(欄外)スミ石原氏へ歳暮持参の為、父出掛く。

^(欄外)スミ橋本秀二郎氏(麻布区筈町)より、礼状(屏風の)着。(図題駒仙人、双幅

の片方のみ持参(駒の方)、□尺五絹本偽物)持参。

^(欄外)スミ本牧小学校より、本牧青年修養園創立委員会決議事項通知書着。

○^(欄外)スミ三越呉服店美術部より、出来の金屏風二双取りに来る。二双とも確に
渡す。

十二月二十二日(水曜日)晴

本日も相変わらず、鳥小屋の建造に一日従事す。

^(欄外)スミ坂本武成氏(千葉県市原郡姉崎町三三五)、岸畑久吉氏(明治卅八年度美
術学校出身)の照会。自分の古希の記念として何か画き下れと絵絹同封にて

送り来る。

^(欄外)スミ興業銀行より、小切手にて利子を送り来る。

^(欄外)スミ宮内省内蔵寮より、本年度技芸員手当として百円の受取方通知書着。

〔欄外〕
スミ松本政成氏より、梨子一箱、鉄道便にて着。

十二月十五日(水曜日)晴

〔欄外〕
スミ音菊(日本橋区呉服町)へ歳暮の礼状を出す。

〔欄外〕
スミ豊島俊文氏へ密柑^{マダ}の礼状を着発す。

〔欄外〕
スミ中村太助氏へ画は明春迄待たれ度しとの通知を出す。

〔欄外〕
スミ藤田彌五郎氏へ明春迄揮毫猶予せられ度しとの通知を發す。

〔欄外〕
スミ高島屋呉服店美術部より、箱書(図題瓢鯰、横物(十一月十五日)持参。

〔欄外〕
スミ高築誠五郎氏鮭の溝糟漬一樽、持参。画料運達の詫^{マダ}に来訪。

〔欄外〕
スミ新井徳次郎氏よりへ梨の礼状を出す。堀江いそ氏(八王子市寺町一番地)より、久保田氏の「○」画、年内に願ひ度しと云ひ来る。放任。

〔欄外〕
スミ出崎幸助氏(徳島県福山市古吉津町)より、数年前依頼せし「○」小片一枚、是非願ひ度しと云ひ来る。金は八九円。ずっと以前に持参せしと云ふ。

〔欄外〕
スミ宮越正治氏より、葡萄酒の案内状着(物品は八日に既着)。

〔欄外〕
スミ林牧之助氏より、画帖の礼状来る。

〔欄外〕
スミ音菊より、歳暮の鮭の案内状着(物品は十四日に着しあり)。田口掬汀氏より、先日御願ひせし尺五縦物は「○」尺八横物に願ひ度しと云ひ来る。例の

小林正月氏より、双幅画の催促状着。松本政成氏より、「○」画帖を送り来る。引受けたるなり。本年の画の整理の為、下欄に附^{マダ}「○」符号を附く。ノ…至急

ヲ要スルモノ、ノ…延引スルモサシツカヘナキモノ、○…本年内ニ是非揮毫スベキモノ、スミ…全クソノ記事ノ事ノミハ用ズミナルモノ

〔欄外〕
スミ大正十年の年賀状(百十二枚)、本日全く書き終る。

十二月十六日(木曜日)晴

〔欄外〕
スミ堀内英智氏(亀戸町五ノ橋日比谷廿号地)、鑑定の為、色紙(絹地)「父筆ろばノ図」一枚、春草筆猿、(尺八絹本)持参。二幅乍ら偽物。柴崎法律事務所(東京市日本橋区通三丁目五番地)の柴崎五十二氏より、近日、川崎鉄之助の件につき参上すべしと通知着。

〔欄外〕
スミ日本美術院より、同人会兼忘年会の通知書「○」来る。出席の返信。

〔欄外〕
スミ山崎傳之助氏(和歌山県和歌山市四百町和歌山新聞社長)より、本月五日着、和歌山県人名簿(前編)の代りとして後編に掲載すべき小点物を揮毫し下

れとの手紙着。放任。関如来氏より、画は本年内に願ひ度しと云ひ来る。

〔欄外〕
スミ木村文雄氏(名古屋市)より、奈良漬一箱着。直ちに礼状を出す。

〔欄外〕
スミ三越呉服店美術部より、金屏風一隻、荷車にて着く。

十二月十七日(金曜日)晴

〔欄外〕
スミ日本興業銀行(麹町区銭瓶町)より、信託預金の利子(税除きたるもの)の通知書、並に領収証(原稿)着。利子は未だ来ず。林代藏氏(満洲長春府日本

橋通二〇)より、本店改築祝ひの小点物願ひ度しと云ひ来る。放任。妹尾春太郎氏より(相州箱根湯本)、「●」画(半打一枚)の催促に来訪。近日出来次第

送附すべしと約束す。箱書は明春持ち帰るべしと云ふ。例の小林画狂人より、

絵の「○」催促状着。

〔欄外〕
スミ石田放光堂(京都市烏丸通二条南入)より、漬物(千枚漬)一樽、鉄道便にて着。直ちに礼状を發す。

〔欄外〕
スミ吉弘茂義氏(大阪市北区堂島濱通一丁目)より、新聞の挿絵を揮毫し下れと云ひ来る。

〔欄外〕
スミ渡辺吉松氏(本郷駒込動坂三七五)より、現代之美術社発行の本へ先生の新年に於ける意見を發表し下れとの手紙着。直ちに謝絶す。

〔欄外〕
スミ宮越正治氏に御歳暮の礼状を發す。

〔欄外〕
スミ米栄旅館支店へ密柑^{マダ}の礼状を發す。

十二月十三日(月曜日)晴後曇雨

〔欄外〕
○スミ林数之助氏來訪。依頼の画帖(高野山赤不動縮図極彩色絹本)を渡す。

〔欄外〕
スミ石原春秋氏、明治神宮御屏風手伝揮毫料として金二百円渡す。

〔欄外〕
スミ三越呉服店屏風箱書出来に付、使へ渡す。

〔欄外〕
スミ寺内新太郎氏箱書持參。図題、三保之松原。大横物、絹本。三原屋所有。

〔欄外〕
スミ橋本秀二郎氏より、「○」屏風は成るべく十五日迄願ひ度しとの電報(返信附)着。

〔欄外〕
スミ橋本秀次郎氏へ電話にて屏風は十六日頃出来に附、一隻のみにてもよろしければ出来次第通知すべしとの通知を發す。

〔欄外〕
スミ入江富年氏(宇都市外下澤)より、なすの漬物一樽、鉄道便にて着。直ちに礼状を發す。倭絵刊行会事務所(東京市日本橋区葎町二丁目十二番地)より、

倭絵逸品集入会申込案内状着。堀野總摠次郎、及青木鎌次郎両氏(豊多摩郡淀橋町角筈一番地)より、先月十五日(月曜日)に來訪の上、細委細上述せし

如く、牛込長岡正伸氏の依頼せし「○」半切、及「○」画帖用小絹本の揮毫、多少の画料追加すべきにより揮毫なし下れとの手紙着。唯々其の絵は、調査の

結果、出来偽なるむね返答す。

〔欄外〕
スミ便宜運送店(東北本線宇都宮駅前)より、入江氏發送野菜一箱送附せしむ

ね通知来る。

〔欄外〕
スミ横山助一氏より、愚祖父米寿記念として林に於て産出したる勝栗の送附通知書着。品物は本月九日、既に着。放任しあり。返送通知發。

〔欄外〕
スミ松本政成氏へ長野県下高井郡倭村岳麗園より、返送料封入にて画の依頼品御礼として、菜果一箱送附通知来る。書留便。

〔欄外〕
スミ齋藤隆三氏より、十二月の同人会は忘年会を兼ね、来る二十二日、伊豫紋で開く事も通知来る。中村太助氏(山形県酒田町上田町)より、「●」依頼画は是非、年内に願ひ度しとの手紙着。画料は大正七年七月十二日迄に、

二百五十円預る。豊島俊文氏(静岡県庵原郡由比町万松園)より密柑^{マダ}一箱の案内状着。松平頼壽氏(香川県教育会長)より、加藤謙吉氏(香川県教育会香川

郡部会長)より「の」今回藍綬褒章下賜「に關し」、紀念画帖製作したき次第、

本小片二点へ揮毫なし下れとの手紙着。放任のこと。

〔欄外〕
スミ章兄と共に年賀状を書き初む。

〔欄外〕
スミ野毛 栗林氏より、藤四郎の茶壺一個持參。

十二月十四日(火曜日)晴

〔欄外〕
スミ英時、松澤の病院に時春兄を訪ふ。

〔欄外〕
スミ禎次郎氏來訪。天野七三郎氏よりの使物(資生堂化粧品)持參。追つて礼

に來る由。天野氏住所、本所区相生町三ノ十九

〔欄外〕
スミ新井徳次郎氏より、梨果一箱鉄道便にて着。(十五日の分に廻す)

〔欄外〕
スミ音菊より、鮭二本着。

〔欄外〕
スミ豊島俊文氏より、密柑^{マダ}一箱、鉄道便にて着。

〔欄外〕
スミ日本美術学院(本郷湯島、田口掬汀氏)へ、「襖絵選集」の到着通知状を發

す。幹子夫人、午後四時頃、女兒分婉す。

にて来たる。

〔欄外〕
スミ林の伯母上、山田伯父上、宅引越手伝の為来訪。

十二月十日〔土〕金〔曜日〕 晴

〔欄外〕
スミ本日、山田伯父上、旧春田氏別宅へ移転の為一同大いに働く。半分片付く。

藤田青花氏、画室の不動明王、及太子六才の御像の写真七八葉持参。思わしからず。石原春秋氏来訪。別に用なし。

先月十九日ノ分同〔以上欄外〕

〔欄外〕
○スミ齋藤隆三氏来訪。依頼画(尺八寸巾、絹本、図題静清。)を渡す。此画

は先月十九日南葵美術展覧会へ出品せしもの。

〔欄外〕
スミ宮内一氏(得應軒)、予て依頼し置きし年賀用名刺二百枚、並に封筒(二百枚)全部で、金五円四拾銭也を持参。刷子はけを五本あつらふ。

〔欄外〕
スミ田口掬汀氏より、「襖絵選集」上下二部□着。

〔欄外〕
スミ三越呉服店より、屏風の箱書用板二枚着。

〔欄外〕
スミ北上俊明氏より、礼状(先日画を引受けしに対する)着。松嶋勝之助氏

(京都東六条下珠数屋町華陽館方)より、画の礼状□に箱書及「●」色紙の催促

状着。藤田彌五郎氏より、「○」画の催促状着。十月下旬迄との約束なりし「に

如何」、と云ふ「ひ来る」。少々怒気を含む様子。

〔欄外〕
半ハスミ井上徳三氏より、「○」横物、「○」小点物は、是非年内に願ひ度し云々

来信。

十二月十一日〔日〕土〔曜日〕 曇

本日、山田伯父上、宅引越応接に行く。夕刻迄に全く移り済む。美術院より、

明年二月、上野に開かるべき試作展覧会の報告書着。

〔欄外〕
スミ米栄旅館支店より密柑一箱着(鉄道便にて)。

〔欄外〕
スミ新井徳二郎氏(長岡市東神田町)より、梨の送附案内状着。

〔欄外〕
スミ橋本秀二郎氏より、「屏風」箱書用板二枚の送附通知書、速達便にて着。

〔欄外〕
スミ萩野仲三郎氏(明治神宮造営局長)、井上清氏、同道にて明治神宮御屏風揮毫の礼に来る。金七仟円の御下賜になる。倉嶋□「庄」三郎、倉嶋常二郎両氏、先年(五浦時代)御依頼し置きし「○」尺八観音の図、御揮毫願ひ度しと云ひ来る。全々覚えざることなりと云ひ張りしかば止むなく帰る。

〔欄外〕
スミ人見鹿太郎(本牧学校々長)、豊の病氣見舞に来訪。

〔欄外〕
スミ橋本秀二郎氏来訪。屏風の「○」箱書都合上至急願ひ度しと云ひ来る。黒

須廣吉氏、観山会日取撰定の為来訪。二十日までにて決定とのこと。

十二月十二日(日曜日) 晴後曇雨

〔欄外〕
スミ信州の某氏、白蛇之図(尺八絹本、偽物)鑑定に持参。

〔欄外〕
スミ橋本秀二郎氏へ電報(紀念寄贈屏風の箱書出来の通知)を發す。

〔欄外〕
スミ東京下谷区上根岸の植物病院技師、庭園の樹木消毒如何を問ひ合せ来る。

原氏宅にて聞かれ度しと云ひて帰す。

〔欄外〕
スミ本牧学校訓導、眞船氏来訪。梅木晃氏(大分県中津町米町)、廣川哨月氏

(福岡県福岡市外住吉町春吉新屋)の紹介にて、画の依頼希望らしき文面の手

紙を及廣川哨月氏手紙、及菓子折二箱(価額二円内外のもの)と共に持たせ寄

す。別に確答せず。

〔欄外〕
スミ株式会社東京会(東京市神田区五軒町十番地)より、展覧会の案内状及招

待状二枚着。

十二月六日(月曜日)曇

スミ紀伊新報社長 小山邦松氏、使を以て、今回、社建設の美術品陳列所出品の染筆揮毫依頼し来る。断然拒絶せり。

スミ北海之実業社より、新年号の挿画依頼し来る。同時に絵絹(小片物)を送附し来る。拒絶す。返送の積り。

スミ林数之助氏より、赤不動の「〇」催促状着。目下揮毫中なり。

スミ先月二十五日、問合せ状をよこせし萩野松蔵氏使、鑑定物(二尺巾、絹本、寿老之図)持参。ひどき偽物なりき。田中積穂博士、予て依頼の「●」画、催促に来る。閑如来氏来訪。用件は山田源一郎に問合せられ度しと云ふ。先月九日の日記に記入あり。

半ズミ井上徳三氏「〇」、画の催促に来訪。近々に揮毫願ひ度しと云ふ。乾南陽氏に対し、十日迄に揮毫は不可能なりとの通知を発す。

スミ長谷榮吉氏に対し、画は来春迄待たれ度しとの手紙を章兄発す。

スミ北上氏、母子画の催促に来訪。

十二月七日(火曜日)雨後大吹雪

スミ北海道美術倶楽部(北海道小樽区花園町北海道之美業社内)へ絵絹を普通便にて返送す。大塚源太郎氏、川島鉄之助氏の件に附、及予て依頼を受けしいけすの書直し「〇」、画幅の催促、及鑑定物(本人持参、墨絵の竹に蝙蝠の図、尺五絹本、金泥の落款入)の為来訪。鑑定物はひどき偽物なりき。川「松」嶋「勝之助」の箱書(ふたのみ「尺五静清」)を持たす。此日、大いに雪降り、六寸余の積雪を見る。

スミ米榮支店(紀伊新和歌浦海浜)より、密柑一箱の案内状着。

スミ齋藤隆三氏より、十一二日頃、画幅頂戴に伺ふべしとの通知状着。

十二月八日(水曜日)晴後曇

小林正月氏より、双幅画の「〇」合作書揮毫の催促状着。大倉書店編集部より、古今画家落款印譜編輯に付き、用紙へ落款と印譜賜はり度しと云ひ来る。放任とのこと。

スミ三越呉服店通信販売部より、宮越正治氏の註問品の送附案内状着。山西亀三郎氏より、予てより(五年前)依頼せし「〇」画幅の揮毫、成るべく至急に賜はり度しと云ひ来る。住所は大阪市東区徳井町二なり。

スミ午後より、父、美術院へ、母、喜久代と同道にて鶴屋へ出懸けらる。

スミ閑如来氏より、来信、別に用なし。

スミ三越呉服店より、宮越正治氏註問の葡萄酒二本、鉄道便にて着。

スミ柴田克己氏より、横物の礼状着。内藤政宗氏(帝室技芸員会、東京市下谷区仲御徒町四丁目三十一番地)より、「〇」紀念品(多分画ならん)の揮毫、至急に願ひ度しと云ひ来る。

スミ御留守中、藤田、入江美法両氏、写真屋二名を伴れて来り、不動尊像及聖徳太子像を夫々二三枚づ、写して去る。松田理学士着「松田謝一郎著」の画像画集に掲採「載」するなる由。

スミ横山助一氏(岡山県阿哲郡野馳村)より、小包(吉備団子粉)着手紙来る迄放任。

十二月九日(金)木曜日晴

石原春秋氏来訪。別に大した用件なし。下の伯父上、鬼の写生の為粘土持参

用画幅の催促状着。

〔補外〕
スミ北澤楽天氏より、近々出品画返却、並に御礼の為後藤氏と来訪の由。

十二月三日(金曜日)大雨、晴、風

〔補外〕
スミ母上、長井利衛門氏宅へ病氣見舞に出掛けらる。

〔補外〕
スミ林敷之助氏来訪。先月十四日依頼せし「●」画帳は、十日頃迄に出来るなら願ひ度しと云ふ。

〔補外〕
スミ東京内米津久戸町 義士会出版部 鈴木竹芝氏より、小堀鞆音氏の紹介で来訪。直ちに帰宅。

〔補外〕
スミ1 高島屋呉服店美術部依頼の還暦祝ひ画帳出来に付、母上、東京高島屋呉服店美術部主任の高橋初郎氏へ渡す。画帳寸法は先月十九日の日記に記載の如し。図題は雲海。此れにて高島屋依頼は全部相済む。(但し三点のみなり、他に扇面四点あり)

〔補外〕
スミ橋本秀二郎氏より、屏風の箱書は寸時ひかへ居られ度しとの手紙着。

十二月四日(土曜日)晴、風

〔補外〕
スミ本日、障子全部張換に着手。玄関、応接間、客間、廊下(南側八畳三間の分)は相済む。

〔補外〕
スミ田口掬汀氏より、本日の訪問は明日午前中に変更せる由速達便にて云ひ来る。

〔補外〕
スミ田中良助氏に、画出来に附取りに來られ度きしと発信。

〔補外〕
スミ北澤楽天氏、後藤良氏、同道にて南紀美術会出品物を返済に來る。画室にて父としばし面談の未去る。

〔補外〕
スミ蔭山義三郎氏(東京市小石川区大塚上町十二、国華社々員)より、受取証

書(手紙)來る。乾南陽氏より、「○」半打「折」、及「○」色紙の催促状着。本月十日頃、取りに來ると云ふ。

〔補外〕
スミ林伯母上より來信。別に大した用もなし。

〔補外〕
スミ清水水氏(三越呉服店美術部)、目下揮毫中の寄贈屏風を見聞に來る。

十二月五日(日曜日)曇

〔補外〕
スミ川島鐵之助氏来訪。大正九年早春、渡せし二尺五寸絹本の追加分として当時持参せし兎玉素行(当時の号は天来)氏の二枚折屏風(まくり、絹本、高山植物の図)を取ること、せり。受取は先方の意によりて特に取らず。

〔補外〕
スミ松田亀七氏使、色紙を取りに來る。四五日して又取りに來る由。

〔補外〕
○スミ1 田中良助氏(株式会社東京会常務取締役 事務所 神田区五軒町十番地、自宅 牛込区柳方町二十五番地)使、画を取りに來る。田中良助氏

筆手紙同封にて、川崎銀行小切手、額面金一仟円のもの持参(内金としての)受取証を渡す。是れと引換に、画(一尺「八寸」幅、絹本、図題、新和歌の浦)

を渡す。約束は一仟五百円。和田鼎氏より、先月二十五日の紙上にては、本日來訪の筈なりしを本月十二日に変更せりとの通知來る。片田覺氏(福岡県

鞍手郡直方町外百合野員島旧宅内)より、予て依頼の「○」画、近々に願ひ度しと云ひ來る。

〔補外〕
スミ中村大観氏より、小点物到着通知(端書)來る。

〔補外〕
スミ田口掬汀(鏡次郎)氏、比叡山の依頼画催促に來る。画書「室」にて寸時父と面談の後去る。和歌山日々新聞社印刷部より、和歌山県人名簿(洋本)前編一部送り來る。放任。

来る。

〔欄外〕 スミ根岸鉄太郎氏使、箱書を取りに来る。図題書初め、小点物。

十一月三十日(火曜日)曇厳寒

〔欄外〕 スミ溝口禎次郎より、画の到着状、並に礼状来る。

〔欄外〕 スミ日本美術院より、北米クリーブランド博物館主催巡廻展覧会の件に関する

通知書着。石原春秋氏来訪。画室にて父と面談の末帰る。

〔欄外〕 スミ紀淑雄氏に対し、本年内に揮毫は不可能なれば来春迄待たれ度しとの間

ひ合せ文を發す。

〔欄外〕 スミ本郷区真砂町十五番地 金親豊治郎氏使、鑑定物持参。偽物。図は雨中

の白鷺二羽、尺五巾、絹本。

〔欄外〕 スミ齋藤隆三氏より、高野の赤不動の実大写真一葉着。

〔欄外〕 スミ田中良助氏来訪。〔〇〕尺八一枚、来月十日頃迄、願ひ度しと云ふ。揮毫

料未納。

〔欄外〕 スミ島田友春氏、溝口禎次郎氏の画を取りに来る。既に發送済なることを告

げしを以て、礼を残して帰る。竹田文吉氏より、松本藤田両氏の〔〇〕画は成

るべく年内に願ひ度しと云ひ来る。(返事は結局前と同様なれば放任とす)

〔欄外〕 スミ午後七時、石原氏秘藏児、愛蔵君、心臟病で歿す。

〔欄外〕 スミ本日、岡野氏より来りし金千百五十円の内、千円を春田氏へ五拾円を春

木氏へ、百円を田代氏へ、夫々見舞金として分配す。但し此の半金(百七拾

五円)は岡野氏へ返済す。

〔欄外〕 十二月

十二月一日(水曜日) 晴

〔欄外〕 スミ橋本氏(三越呉服店美術部内)〔〇〕屏風の催促に来る。

〔欄外〕 スミ中村大観氏の使〔〇〕小点物の催促に来る。

十年三月十八日、森氏使／絵絹代トシテ揮毫料／追加金金一百円也／ヲ預て

行ク確に受取

〔欄外〕 森豊之助氏より、書留便にて金一百円の受取証(母の筆本物なり)を送附し来

る。

〔欄外〕 スミ石原氏宅へ、通夜の為、十二時頃迄、座り暮す。

十二月二日(木曜日)大雨後晴 快晴

〔欄外〕 スミ紀淑雄氏に対し古画引換の画幅(五千円以上の価額のもの)揮毫を全部承

認す。

〔欄外〕 スミ石原氏の葬式を送りて會澤火葬場へ行く。

〔欄外〕 スミ蔭山興東氏(國華社)國華(百四十五号ヨリ百八十七号迄、百二拾九円)持

参。確に金は受取引換で本人へ渡す。

〔欄外〕 〇スミ 中村大観氏依頼の小点物絹本、巖島之図、京橋区銀座三丁目拾

七番地三間印刷所宛にて「書留にて」發送す。

〔欄外〕 スミ小林正月氏より、鑑定物の到着状着。田口掬汀氏より、四日午前参上す

との通知来る。

〔欄外〕 スミ南紀美術会より、展覧会に関する相談会に出席せらる、や否や、問ひ合

せ来る。直ちに欠席の由通知す。山宮半四郎氏(越後国地藏野町)より、〔〇〕

還曆画帖(粹の内法、横正味六寸八分、堅正味九寸二分五厘の由)及〔〇〕婚禮

二十八日頃参上すべしとの手紙来る。

〔欄外〕
スミ本日、母上、時春兄を病院に見舞ふ。

〔欄外〕
スミ茶の間の畳表を取換ふ。本日は十畳のみ相済む。

十一月二十七日(土曜日)晴風強し

宮川大壽氏より、内容書留便にて二十四日に手紙にある如く、「〇」二尺巾、丈四尺九寸のものにて願ひ度しと云ひ来る。北上俊明君より、是非「〇」画幅にて年内に頂き度しとの手紙着。

〔欄外〕
スミ田口掬汀氏より、比叡山の依頼画用の枠一組送り来る。

〔欄外〕
スミ小林正月氏より、鑑定物二幅着。真綿少量同封、鑑定物は二幅乍ら同封

〔欄外〕
「〇」説明書の如く大したものに非ず。

〔欄外〕
スミ畳の表換、本日全部済む。

〔欄外〕
スミ〇溝口禎次郎へ依頼書(尺八、絹本、和歌の浦一枚)出来に付、書留郵便にて発送す。

十一月二十八日(日曜日)快晴

〔欄外〕
スミ信州 柴田克己氏使 田口己之吉氏来訪。約速通り、小点物、出来しあらざるに付、明日迄必ず御渡しすべしと返答す。

〔欄外〕
スミ東京市日本橋区箔屋町十六番地 泉田吟松堂酒井誠一郎氏、鑑定物持参。

西郷孤月氏筆、尺八絹本、図題、秋野。櫻井氏来訪。来月十日、相談取次の為再び来訪の由。京橋区彌左衛門町 蔭山興東氏(国華社)、予てより依頼受けおしし「〇」尺八一幅(画料未納)の催促に来訪。

〔欄外〕
スミ德井上徳三氏父 徳兵衛氏来訪。依頼の「〇」横物近々に願ひ度しと云ふ。

本月四日、根岸鉄太郎氏の持参せし箱書の催促に来訪。東京市本郷区駒込動

坂町二二七 高田早苗氏より、近い内に観山会開催すべきに付、「不日」黒須廣吉氏をより「つかわすべしとの手紙着。京都市上京区新道通東丸太町上ル

洛陽美術社より、洛陽美術(雑誌)一部着。

〔欄外〕
スミ大阪市北区中之島三丁目 大阪朝日新聞社より、新年の挿絵依頼し来る。

十一月二十九日(月曜日)晴

芝区伊皿子三十七番地 森豊之助氏使、麻布区霞町一番地 若山猪作氏、大正四年二月上旬、金一百円を以て依頼せし「〇」大画選紙の催促に来訪。結局、金一百円の受取証の送付を希ふこと、して返答す。

〔欄外〕
スミ〇1 柴田克己氏使 田口己之吉氏、約速の画「〇」小点物、絹本、図題、梅)、取りに来る。確に渡す。

〔欄外〕
スミ大阪朝日新聞社学芸部に対し揮毫断り状を發す。

〔欄外〕
スミ本牧小学校訓導 氏家直氏来訪。病氣見舞ひ。

〔欄外〕
スミ小林正月氏に鑑定物二幅(二幅共真偽不明)、返送す。

〔欄外〕
スミ大阪市北区曾根崎上四丁目二三三 大阪時事新報社より、新年の挿絵依頼し来る。直ちに断り状を發す。

〔欄外〕
半ズ高橋初郎氏来訪。紙本半折双幅及紙本横幅一枚の礼として、金一仟円持参。確に受取る。「〇」团扇四点、「〇」画帖は早々に願ひ度しと。吟松堂酒井

誠一郎氏使、箱書を取りに来る。長谷榮吉氏来訪。「〇」紙本半打一枚、「〇」絹地色紙四枚、来月十日頃迄に願ひ度しと云ふ。出来次第通知の約速。

〔欄外〕
スミ東京市外戸塚町下戸塚荒井山 紀淑雄氏より、本年夏持参せし古画と交換に新校舍買入増設費追加金に要する五仟円を「〇」画にて「〇」頂き度しと云ひ

十一月二十三日(火曜日)風雨稍々寒し

〔(欄外)〕画の催促状着。直ちに四五日延引すべしと電報を發す。

〔(欄外)〕画の催促状着。直ちに四五日延引すべしと電報を發す。
スミ二十一日に通知ありたる小山初治氏より、使として和田誠助なる者、佐々氏より岩倉氏に宛たる讓渡状及下村宅より佐々氏に宛たる預り状(入江多平君筆)の二証「書」を持參。父面談の末、使より一仟円の受取証を取りて現金を渡す。

〔(欄外)〕スミ佐々氏へ岩倉氏の金一仟円、請「求」は「承」知なりや否やを問ひ合す(章兄筆)。

〔(欄外)〕スミ溝口禎次郎氏より、二十五日に帝室御物をの拝觀を許可する故來られたしとの手紙着。

〔(欄外)〕スミ比叡山天台宗務庁内 木下氏宛にて、予てより依頼の画(二尺幅三尺の横物)、書留小包にて發送。

十一月二十四日(水曜日)雨後晴

〔(欄外)〕スミ昨日端書にて問ひ合せし佐々政徳氏來訪。岩倉氏代理の小山弁護士より來りし内容配達証明の手紙を証拠品として、借り受けたしとして持「ち」行きたり。

〔(欄外)〕スミ本牧町青木氏使、良寛筆書二幅持參、二幅共偽物。宮川大壽氏より、内容配達証明の書留便にて依頼の「〇」画(二尺中、豎四尺九寸)、本年内に是非揮毫せよ、若し揮毫せざる時は訟取すべしなどおとし来る。直ちに約速「束」の相違せること(即先年約速せしは五尺なりしを、二尺中丈四尺九寸なるもの請求し來りし事)を問ひ正す為、端書を出す。

〔(欄外)〕スミ昨夕、北上俊明君、予て依頼し置かれし「〇」画の催促に母子の名に來訪。玩具、食品等持參。年内に願ひ度しとのこと。諸井恒平氏より、予て依頼の「〇」〔四条の橋〕の図、至急願ひ度き由云ひ来る。

十一月二十五日(木曜日)曇

兄玉素行氏、千葉県我孫子町に移転せりとの通知来る。相州箱根湯本福住橋畔 含翠堂妹尾春太郎氏より、〔〇〕半打の催促状着。近々來訪、それ迄のこと。午後、兄玉素行氏來訪。画室にて父と面談。二三時間にして帰宅せる。例の小林正月氏より、〔〇〕双幅画の催促来る。武州加須町 荻野松藏氏より、鑑定の日取り問合せ来る。直ちに何時にても宜敷しとの通知を發す。夕刻、大久保氏母子來訪。神戸市葺合町 竹田文吉氏より、〔〇〕画の催促状着。直ちに本年内に揮毫は不可能なりとの通知状を發す。千葉県東金町 和田昇氏より、近々參上すとの手紙着。

十一月二十六日(金曜日)曇後雨

〔(欄外)〕スミ京都市御幸町通四条上ル近又旅館内 田中良助氏より、奈良漬一樽着。
〔(欄外)〕スミ栃木県下野国塩谷郡関谷村郵便局区内 金澤江連善多氏より、柚実一箱鉄道便にて着。直ちに礼状を發す。矢尾豊氏令兄 櫻井氏來訪。三幅対の揮毫料、金二百円の手付金として、金五拾円は大正六年六月十三日、母に渡せりと云ふ。母の書きし受取証を持參す。近々、又來訪すとのこと。

〔(欄外)〕スミ日本美術院より、本月二十八日、偕楽園に於て相談し度き故來会し下れとの手紙着。直ちに出席すべしとの通知を發す。
〔(欄外)〕スミ横濱久保山停留場上 三浦杏岳氏より、近火見舞状着。関如來氏より、

〔欄外〕
スミ中村大観氏（東京市京橋区銀座三丁目拾七番地三間印刷所内 日本大観発行所。自宅は京都市疎水浜通松原北入）、予てより「の」依頼品（尺八を長さ一尺五寸五分に切りし横物）〔○〕小点物の催促に来る。本牧小港の市川氏祖母来訪。

十一月二十日（土曜日）雨

〔欄外〕
スミ京都にある中村岳陵氏より、旅行地の様を通知し来る。矢尾豊氏、母宛にて昨日の話の如く手付金を渡せしは、大正六年拾二月拾四日なりと云ひ来る。

〔欄外〕
スミ瀬能正太氏より、画の到着通知状着。小林正月より、例の〔○〕双幅の催促状来る。日本橋区通一丁目十九番地 大倉書店編輯部より、古今名家落款印譜出版に付、父の常用の印影並に落款を記入し下れと小片の紙同封にて、依頼し来る。放任。

〔欄外〕
○半ズミ夕刻、奥田芳彦氏来訪、出来の画（尺五、絹本、南山望）を渡す。未だ〔○〕豆画帳は出来せず。東京市日本橋区瀬戸物町二十三番地 松田亀七氏来訪。用件は、那智の瀧（●）〔尺八〕出来の上苦なるに後一枚（尺八）揮毫依頼し来る。八百円は、大正六年十二月持参とのこと。

〔欄外〕
スミ青森県北津軽郡小澤村 宮越正治氏より、土産の林檎一箱の案内状着。
〔欄外〕
スミ京都市麩屋町三条下 田中左川氏より、京都院展の報告書着。

十一月二十一日（日曜日）曇後晴

〔欄外〕
スミ大正八年九月十八日、京橋区新栄町三ノ五 佐々政徳氏より、揮毫料として金一千円受け取りし所、今回都合により同□氏は芝区二本榎西町二番地

岩倉具顯氏に権利を譲渡せられしにより、二十三日、岩倉氏代理人、浅草区南元町一番地 弁護士小山初治氏は、右揮毫料金一千円取りに来らる由、書留郵便にて云ひ来る。

十一月二十二日（月曜日）晴

〔欄外〕
スミ東京に於ける中村大観氏より、〔○〕画（小点物）の催促及出来の上は三間印刷所（宿所は十九日に記入しあり）内、中村大観宛に送附せられ度しとの手紙着。期間は本月中。

〔欄外〕
スミ東京市日本橋区瀬戸物町 松田氏より、予て依頼の「預り置し」〔○〕色紙（春草筆）、近々使屋を以て取りに来る由、又其の画と対になる〔○〕色紙一枚、依頼し来る。

〔欄外〕
スミ北澤楽天氏より、出品画の到着通知来る。長野県須坂町 松澤彦太郎氏より、息死亡の通知並に近々来訪問合せ状着。

〔欄外〕
半ズミ奥田芳彦氏より、先日渡せし尺五の礼並に〔○〕豆画帳の催促状着。
〔欄外〕
スミ青森県北津軽郡内湯村字尾別 宮越正治氏より、林檎一箱、鉄道便にて着。直ちに礼状を出す。

〔欄外〕
スミ北澤楽天氏より、出品画の礼状、英時宛にて着。
〔欄外〕
スミ東京市麩町区下二番町十四番地 純正美術社より、本「芳崖と雅邦」の広告来る。

〔欄外〕
スミ午後十一時頃、西崖下の春木氏宅より、突然火を失つし一家半焼の憂目に合ひたり。風下の會田氏宅及吉田氏宅を見舞ふ。女兒（十一才）焼死せる騒ぎありたり。

十一月十六日(火曜日)快晴

〔補外〕 スミ本月七日に依頼を受けし山口政二郎の箱書(鹿の図)、本日取りに来る。

〔補外〕 スミ福島県岩代国郡山郡山町 川口誠三郎氏より、十四日に案内状に接せし通り、百目柿一箱、鉄道便にて安着。直ちに同氏に向つて礼状を發す。

〔補外〕 スミ東京高島屋の高橋初郎氏へ、予て依頼を受けし画帳の寸法失念に附、問合はす。竹内常吉氏〔○〕小点物(自分の)及自分の照会せし宮本氏の〔○〕尺八の催促に来訪。

〔補外〕 スミ審美画会より、鑑定物返送の催促状着。

〔補外〕 スミ東京牛込区喜久井町十八 溝口禎次郎氏より、先日、島田友春氏の持参せし太田氏の〔○〕尺八(不明)絹本の催促状着。

〔補外〕 スミ東京市日本橋矢ノ倉町一番地 幽篁堂 本山豊實氏より、南画師林苔巖氏の展覧会の招待状来る。

〔補外〕 スミ東京府荏原郡松澤村 東京府立松澤病院より、領収証書(十一月十三日より)〔の〕十一月分入院料、金五拾四円(の)及領置証(小遣金金六円)着。

十一月十七日(水曜日)晴後曇

本日、母上、及伯母上は、喜久代、豊、弘等を伴ひ東京に出かけらる。菱田春雄君自作の画四点、批評を請ふ為持参。小倉市鍛冶町八十九 藤田彌五郎氏より、〔○〕尺八一枚〕画の催促状来る。

〔補外〕 スミ田山花袋、徳田秋声両氏誕生五十年祝賀会より、会の案内状着。欠席を申し出づ(端書にて)。

〔補外〕 スミ日本橋区芳町十三番地 鐘英堂齋藤美術店より、鐘英と名付くる画集、小包便にて着。

十一月十八日(木曜日)晴

〔補外〕 ○スミ1 東京市下谷区御徒町二ノ十七 瀬能正之氏へ、金地横物(横三尺縦二尺)、絹本、図題目之出、本日郵便書留小包にて發送す。

〔補外〕 スミ大阪高島屋呉服店美術部より、出品画の礼状着。乾南陽氏より、〔○〕半切四幅対(図題は倭人物へ一寸景色又は草花をあしらひ、彩色四季とのこと)、来月十日迄、揮毫のこと依頼し来る。会へ出品の由。

〔補外〕 スミ松澤病院より、十二月分入院料、十一月二十六日迄、納付のこととの告知書来る。

〔補外〕 □「せられ度しとの」告知書来る。

〔補外〕 スミ横浜本牧町 青木辰五郎氏、西郷孤月氏筆、尺八絹本の箱書持参。図題、初春。直に出来。

〔補外〕 スミ審美画会より、予て「より」依頼の鑑定物を取りに来る。

十一月十九日(金曜日)晴

〔補外〕 濟□高橋初郎氏より、画の礼及飯田新七氏還暦祝ひの〔○〕画帖、寸法の通知来る。画帖は尺三絹本を横に枠張りしたるもの。寸法は縦九寸、横一尺二分四分。

〔補外〕 □井上徳三氏より、予てより依頼の〔●〕画の催促状着。

〔補外〕 ○スミ北澤楽天氏に宛て、南紀美術会第二回展覧会の出品画(図題静清、寸法尺八絹本、非売品とす)を書留郵便小包にて發送。同時に右画の通知書をも發す。東京浅草の矢尾豊氏、予て三百五拾円にて依頼せし〔○〕尺八絹本一枚の催促に来る。母は画は全く済み金は外に預らずと云ふ。本人は、大正六年(不明)頃、暮に金を持参(然も裸金にて)し無理に揮毫承諾を得て帰りしなりと申し立つ。よく相方に調査すること、して、一先づ返答す。

〔彌外〕
スミ 東京市内藤新宿町一丁目六〇 中村米三氏使、箱書持参。鑑定の結果、偽物と判明。一昨年、一度持参せしことありし、春草氏筆柏に鳥の図(春草

画集中にあるもの、唯杉を取り去りたるもの)。寸法、尺五。

〔彌外〕
出来スミ 三越呉服店美術部主任代理 橋本氏、予て依頼せし中村、朝吹両氏に寄贈の「〇」金屏風一雙の催促に来る。出来なら十二月四日(此の日、朝吹氏、洋行より帰宅の筈)頃迄、是非願ひ度しと云ふ。

〔彌外〕
スミ 島田友春氏、午前、来訪。用件は昨日の文面と等しかるべければ、此処に略す。乾南陽氏、午後、来訪。用件は昨日の文面の如かるべければ此処に省略す。

〔彌外〕
スミ 本日、母上、伯父上(山田の)と同道にて、時春兄を東京見物に伴ふ。

〔彌外〕
スミ 東京市下谷区御徒町二丁目拾七番地 瀬能正太氏より、「〇」催促状着、二十日頃、来訪の由。

〔彌外〕
不済スミ 東京市浅草区福富町二十八番地 矢尾豊氏より、「〇」催促状着。兩三日中に来訪の由。

十一月十四日(日曜日)快晴

〔彌外〕
スミ 審美画会より、八日に送る筈なりし白鷺の図を返送し下れとの手紙着。放任。

〔彌外〕
スミ 郡山町、川口誠三郎氏より、土産の百目柿一箱の案内状着。本月二十二日頃、当着の由。

〔彌外〕
スミ 府下瀧ノ川町田端百八十三番地 勝溪彫金会発起人一同、及会主 滑川勝溪氏より、招待状着。

〔彌外〕
スミ 琅玕洞主 林敷之助氏より、「〇」画帖の依頼を受く。揮毫料として金

二百円受く。期間は本年十二月中旬迄とのこと。絹は以前に預りあり。

〔彌外〕
スミ 北澤楽天氏へ礼状(封筒)を発す。(章兄筆)

〔彌外〕
スミ 日本橋区住吉町十六番地 都表具根岸鉄太郎氏へ箱書出来の通知書を発す。

〔彌外〕
スミ 源園養鶏場より、トムソン系横斑プリマスロツク三羽(一雄二雌)着す。

十一月十五日(月曜日)快晴

本日、章兄、時春兄の病室「を」訪問。芝区西久保巴町二十四番地、現代之美術社より、現代之美術一部署。東京府淀橋町角筈一番地 堀野惣次郎氏より、大正元年及明治四十五年日附の往復葉書返信三枚(内二枚は五浦より、一枚は出先の母よりの)、及絹の小点物(縦一尺横七寸)持参。右「葉書」は五浦時代に右の方より、東京四谷区の長岡某氏よりの照会にて、依頼を受けた物の催促状の返信なり。又、「〇」絹は当時依頼を受けし物と同形のものなり。揮毫料を受取しや否やを調査し、合ふことにして一先返答す。

〔彌外〕
スミ 東京市小石川区竹早町七八 三宅鑛一博士より、診察は本月廿三日(大祭日)に、略為すべしとの返信来る。例の小林止月氏より、「〇」半折「切」画の催促状着。

〔彌外〕
□ スミ 高島屋呉服店美術部 田中信吉氏より、先日、高橋初郎氏よりありたる催促と同様の画の催促状着。

〔彌外〕
スミ 〇 2 紙本半折「切」双幅(寒山拾得の図)、及絹本横物「瓢鯰図(瓢鯰) (縦一尺四寸、横二尺八寸位)(可成大なるもの)、書留小包便にて大阪市西区江戸堀南通一丁目二拾番地 高島屋飯田呉服店美術部宛着送す。高橋初郎氏へ右画の発送を通知す。

十一月九日(火曜日) 快晴風強し。

〔欄外〕 スミ本牧の青木氏、箱書(本月五日持参)出来に付、使、取りに来る。

〔欄外〕 スミ日本橋の石川安助氏使、箱書持参。図は布袋。尺八物なり。直ちに出来渡す。

〔欄外〕 半スミ井上徳三氏、築地の井上徳兵衛氏の「〇」画帖七枚(期間不定)、及自分の「〇」小物一点(期間不定)の催促に来る。

〔欄外〕 スミ七日に来訪せし沓名藤吾氏より、鑑定物の問ひ合せ(作者及製作月日)の手紙来る。即ちに返信。

〔欄外〕 スミ東京高輪泉岳寺内 鹿苑学院設立後援会本部事務所(南千住三之輪二八六)より、会に出品せられたき由来信。

〔欄外〕 スミ鬼頭如石氏、及豊嶋渠成氏の個人展覧会の招待券来る。

〔欄外〕 スミ関如来氏より手紙着。用件は娘の費用の為、揮毫を願ふとの事。放任。

十一月十日(水曜日) 晴

〔欄外〕 スミ三溪園の河田氏、予て貸し置きし明治神宮御屏風写真二葉、返却に来る。

〔欄外〕 スミ名古屋日々新聞記者 山口新一氏画の揮毫依頼に来る。断然、謝絶す。

本日、入江多平氏、下村晴時氏二階へ移転す。午前、電話にて南記美術会より、「〇」画帖の催促が来る。期間未定。

十一月十一日(木曜日) 少雨

〔欄外〕 スミ芝の中村早兵衛氏、箱書を取りに来る。図題、松風。寸法、二尺巾。

〔欄外〕 スミ横浜野毛の某氏、鑑定物持参。図は竹に雀。寸法、二尺巾。筆者、大観。真筆。

十一月十二日(金曜日) 雨後晴

美術学校内 フェノロサ氏記念会より、美術学校々友会雑誌一部着。関如来氏より、両三日中に来訪する由端書にて申越す。

〔欄外〕 スミ島田友春氏、明日来訪の事、及例の骨董相談、及溝口氏の「〇」依頼物、問ひ合せ等来信。東京市外西ヶ原二三 乾南陽氏より来信。用件は友人より依頼を受けし物の揮毫依頼に付て、来訪の上都合を伺ひ度き事。予て預り置きたる、狩野家風俗人物画幅の代りたる「〇」半切一枚、及栄之「筆三画幅」の代りたる「〇」半切一枚、並に以上に関係なき「〇」色紙(画面には例の「・」色紙とあり)一枚の催促状なり。

〔欄外〕 スミ南紀美術会より、来る廿三日より三越に開催の展覧会に出品、御援助希願上げ「下され」度き由「しと」云ひ来る。「尚」、廿四日は当番に付、早朝より出席下れ等勝手なることを云ひ来れり。

〔欄外〕 スミ青山南町五ノ四五 北澤楽天氏より、自作の明治天皇の御聖像進呈の為、両三日中に使来訪の由、手紙来る。

十一月十三日(土曜日) 晴後雨

〔欄外〕 半スミ高島屋美術部主任 高橋初郎氏、電話にて本月廿日頃大坂に開催すべき「〇」展覧会に出品すべき「〇」半折「切」、及「〇」小点物(共に紙本)、不済並に飯田氏に祝ふ「〇」画帖(絹本)一枚の催促を為し来る。共に、本月十五日頃迄とのこと。

〔欄外〕 スミ北澤楽天氏使、昨日手紙の趣取り、天皇御聖像進呈の為来訪。

〔欄外〕 スミ先月廿七日、依頼を受けし萩原文一氏箱書、本日使持参の為ち取りに来る。図題大宝山。

〔欄外〕

〔欄外〕

〔欄外〕

〔欄外〕
スミ新潟県の渡辺喜四郎氏より、鉄道便にて梨一箱着。直ちに礼状を発す。

〔欄外〕
スミ九月分の水道料、本日、全部納む。

〔欄外〕
スミ弘前市茂餅〔新〕町一七 画家三上大弘氏より、己が画会後援の為、出品し呉れとの用件にて来信。放任。

〔欄外〕
スミ関如来氏に、観山会の観山画集発行日は黒須廣吉氏に問はれたしとの返信発す。

〔欄外〕
スミ本日より、物置裏土手工事の為、土工(三人)従事初む。

十一月六日(土曜日) 快晴

宇都宮の河合の一族(同行八人)来訪。広島市中島本町十七番地 大江幸輔氏、広島市水道主町一〇九番地 高羽幸槌氏の照会にて、手製の純銀製金赤銅像眼松上の孔雀の図の花瓶一箇持参。〔〇〕画の依頼をなす。寸法不定、花瓶の価額、百五拾円見当。

〔欄外〕
スミ横浜の〔〇〕栗林氏、画の催促に来る。柿一籠持参。

〔欄外〕
スミ東京会の田中氏、此の秋の展覧会に出品すべき〔〇〕画の催促に来る。

〔欄外〕
スミ横浜市本町六丁目八一番地 合資会社朝松組より、昨日、渡邊喜四郎氏より送り来りし梨一箱の運賃「として」、五拾銭支払ひしを返済すべき由、文面の手紙着。

東京市本郷区駒込神明町四四五 橋本静水氏より右次第依頼し来る。

一、〔〇〕尺八絹本 一葉 青木弥兵衛氏

一、〔〇〕尺五絹本 々々 橋本吉次郎氏

右二点共図題随意の事

潤筆料として前者一千円、後者五百円、出来次第持参の事。

十一月七日(日曜日) 晴

〔欄外〕
スミ神田区一ツ橋通町十一番地、杏名藤吾氏、孤月氏筆屏風捲り(半双)、鴨の図鑑定に持参。真筆。明治卅九年の作。

〔欄外〕
スミ本郷区金助町、山口政二郎の使、箱書(鹿の図)持参。鑑定物として、紙本「スミ」半折「切」(図は黄初平)、双幅持参真筆。「スミ」箱書は預る。

〔欄外〕
スミ本牧町、青木氏、箱書の催促に来る。造営局より御供物として餅一箱送り来る。

〔欄外〕
スミ審美画会に白鷺の図は真筆なることを発信す。

十一月八日(月曜日) 快晴

〔欄外〕
スミ明治神宮造営局に頒賜品(餅一箱)の「到来」通知を発す。返信なり。

〔欄外〕
スミ明治神宮造営局より、頒賜品の案内状着。

〔欄外〕
スミ審美画会より、鑑定物の催促状着。

〔欄外〕
未返「スミ」審美画会に鑑定物を發送す「普通便にて」(取消す)未だ發送せず。「未だ」放任。

〔欄外〕
返送ズミ有田音松氏に自作の本と交換的に揮毫を依頼し来りし物を返送(普通便にて)す。(未だ發送せざる由、放任)

〔欄外〕
スミ有田音松氏に揮毫の断り状を發す。

〔欄外〕
スミ朝日新聞社より、横山大観氏に当てたる手紙舞ひ込みたるに付廻送す。

〔欄外〕
スミ先日廿七日に依頼を受けし萩原文一氏の箱書出来。直ちに通知す。

〔欄外〕
スミわんや屋の会の箱書(先月二十七日持参)出来。下村晴時氏宅に持参。

〔欄外〕
スミ能楽書院より、能面大観内容見本郵便にて着。

十一月三日(水曜日) 曇後雨

〔欄外〕
スミ午後、高橋敏(中根岸町百八番地安楽寺横丁)夫人は、亡夫(高橋廣湖氏)

の香奠御礼として香合一個持参す。三溪園、河田氏、樋口氏の揮毫依頼の件に付来訪。

〔欄外〕
スミ明治神宮御屏風写真二葉、二三日の間貸与す。

〔欄外〕
スミ湯島六ノ二八 萩原文一氏使、箱書の催促に来る。両三日中に右所に届け遣す約束なり。

〔欄外〕
スミ山形氏、夕方石燈籠の件(全く謝絶す)に付いて来訪。明治神宮表参道新設記念として、純銀盃一对(服部製)下さる。

〔欄外〕
スミ和歌山市本町一丁目 高山藤右衛門氏より、父立寄りの際揮毫せし物の礼状着。

〔欄外〕
スミ駒込林町一〇五、関如来氏より、二三日中に来訪のこと、及観山画集発行の日を問ひ合はず手紙着。

〔欄外〕
スミ審美画会より審美(十一月号)着。

十一月四日(木曜日) 快晴

宮川大壽氏(麻布区笹筒町五番地)、予ねて依頼の「〇」尺五、一枚の催促に来る。預りありし小包、郵便及為替受取。

〔欄外〕
スミ及、母より、指出せし金卅円の受取等を返す。揮毫取急ぎ。

〔欄外〕
東京市四谷区南寺町二三番地 板東勘七氏、叡山延暦寺地方部長 坊城英巖氏の発起にかゝる思想問題研究所と云ふの如き観音を本尊とする、宣伝道場

なるものを起するに付、勧進帳内に寄附として貼り付ける「〇」小点物(本尊

の観音の現物大、或は引延の図を描くこと)の依頼に来訪。四五日後に再び相談に来訪の由。観音像「〇」写真二枚葉(実物大のもの及引延しのもの)預る。

揮毫期間、不定。

〔欄外〕
スミ日本橋の経師職 根岸氏の使、予て依頼の箱書二幅(図は高士及紅葉)を取りに来る。二幅とも間違なく渡す。

〔欄外〕
スミ又観山会「員」井上辰九郎「徳三」氏に揮毫し上げし書初めの図一幅、箱書依頼の為、預け行きたり。期間不定、近い内に。

〔欄外〕
スミ高島屋呉服店美術部 高橋初郎「〇」半「切」紙本一枚、「〇」画帳一冊、「〇」小点物(尺五を長さ七八寸に切りし横物)一点の催促に来訪。十三日の展覧会迄に間「に」合ふ様、揮毫のこと。多平君より百目柿一箱着。

〔欄外〕
スミ審美画会より、鑑定依頼の端書着。井上徳三氏は京都より、画の「〇」催促状をよこす。放任々々。

〔欄外〕
スミ有田音松氏より、自分著作の国民の声及国士の声二冊と共に、単ざく、及色紙各一枚づゝ、送り来る。漸「暫ら」く放任のと。

〔欄外〕
スミ審美画会(日本橋区通四丁目)より、白鷺の群の図、鑑定の為送り来る。期間不定。

十一月五日(金曜日) 快晴

〔欄外〕
スミ本牧の青木氏使、春草氏筆、日之出に松の図、箱書の為持参。二三日中に取りに来る筈。東京の松田氏(書画店)使、「〇」画、催促の為来る。

〔欄外〕
スミ芝区西久保巴町六一 中村平兵衛氏、箱書一幅持参。出来次第通知の筈。

〔欄外〕
スミ先日送り来りし能楽大観の一部、本日全く返済す。普通便で。

二十九日(金) 曇

〔補外〕
スミ午前、横浜久保山停留場工 三浦李岳氏より、横浜日々新聞、五六枚(中央一枚の第一面に父に過日面会せし時の感想文掲載とありたり)着。午後夕刻、高村光雲氏照会にて、天賞堂店員 亀田福松氏、「○」色紙四枚(内三枚は鳥ノ子、一枚は裏箔)持参。期間不定。

三十日(土曜日) 雷雨後晴

午前、英時、上京、後れて母喜久世、弘、上京す。共に林伯母帰京せらる。宮内省調度頭 吉田平吾氏より、過一月御依頼の皇后ノ宮御風呂先御屏風に関する「○」催促状(書留)着。

午後、山田叔父来訪、雑談す。(以上小生留守ニ付章兄記ス)。南葵育英会より、例会の通知書(往復葉書)着。

〔補外〕
スミ島田友春氏より、溝口氏新築祝ひの絵、来月十日頃揮毫のこと、及骨董買付けの可非を問ふ手紙着。齋藤隆三氏より、神宮御屏風写真発送のこと、スミ及予て依頼の二尺物の「○」催促状着。

三十一日(日曜日) 晴

〔補外〕
スミ午前、新潟県蒲原郡金沢 渡邊億四郎氏より、梨の送り状着。

〔補外〕
スミ芝巴町六一 中村平兵衛氏より、箱書の依頼状着。

〔補外〕
スミ右、中村氏に直ちに返信(往復端書)にて、承諾の通知を為す。黒須廣吉氏、観山会の日取撰定、及来年旅行先の選定、相談に来る。予て貸与せし雅邦翁の画幅を持参。

〔補外〕
スミ山手本町警察署武術教師 田口巳之吉氏、信州 柴田克巳氏の代理にて、

「○」小点物の催促に来る。来月二十五日迄とのこと。

〔補外〕
スミ府下田端一八三滑川方 勝溪彫金会発起人一同より、会の報告書来。倉嶋次之亮氏より、予て通知ありし「○」扇面郵便小荷物にて着。

〔補外〕
スミ午後、齋藤隆三氏より、写真二葉着。

〔補外〕
スミ奥田芳彦氏「○」半折「切」一枚、依頼の為来訪。早々に要するとのこと。

〔補外〕
スミ本牧学校長 人見鹿太郎氏の勤続三十年記念祝賀贈呈に当つべき寄附金募集に、発起人一同来訪。

〔補外〕
十一月

十一月一日(月曜日) 曇後雨

小林正月より、例の駄句一二、及「○」催促の葉書着。

〔補外〕
スミ本牧小学校より寄附金の催促に小使来る。寄附金として金五円を人見校長に呈出す。

〔補外〕
スミ建昌大夢氏より招待状着。

〔補外〕
スミ山田伯父上、明治神宮鎮座祭に参列せられ、餅一折、及祝盃一箱の御供物を分譲せられたり。

十一月二日(火曜日) 快晴

章、英時、山田の伯父上と共に、青山外苑競馬場に於ける流鏑馬を観覧に出かく。

〔補外〕
スミ本牧小学校校長 人見鹿太郎氏寄附金の礼に来る。

〔補外〕
スミ東京麹町区飯田町三丁目九番地 株式会社能楽書院より、縦一尺五寸、横一尺位の本(内様「容」未見「知」)小包郵便にて着。

廿二日 曇天

吹き降りなるも午後には止む。別して崩れもなし。水道局より、水漏のところ
修繕ニ来る。植清、午後より来る。先生より、明朝七時帰宅との電報来る(午
後十一時過ぎの由)。

廿三日 曇天

朝八時前、先生御帰り。中村大観氏より、松茸一籠至来。大阪高寫やよりの
小荷物着。内務省 井上氏より、電話にて明後廿五日、神宮拝観の事申し来る。
夜、法隆寺、醍醐寺、高山藤石衛門、高寫屋へ礼状書く。

廿四日 晴

南米岳、カタログ一部持参。京都 中村大観使、催足ユツに来る。明治神宮造営
局より、来月一日、鎮座祭の招待状来。

廿五日 晴

先生初め一同、明治神宮、拝観すべく出京。同行十六七人。

コレヨリ以下英時記ス

●大正九年十月二十六日(以上欄外)

二十六日(火) 快晴

午前。精藝出版合資会社員 宮本直一氏、会社発行の現代大家名画集刊行の
件に付来訪。横浜 茂木氏の使、木村武山氏筆、達磨之図の箱書、依頼にて

来訪。預からず。

午後。島田悦山氏、南葵「祀」美術会ノ代表ニテ、桐箱入「〇」画帳持参。依頼
に应ず。期間不定。

スミ(欄外)和歌山県紀伊新和歌ノ浦の米榮旅館支店より、かますの糟漬一樽、鉄道
便にて着。

二十七日(水) 曇後雨

スミ(欄外)午後、下村伯父上、双壁会会員の箱書持参。観音之図。

スミ(欄外)東京本郷湯島六ノ二八、萩原文一氏の使箱書持参。図は桜樹下の公卿。

両者共、期間不定。

半ズミ(欄外)東京小石川区関口町二〇〇、奥田芳彦氏より来信。近々来訪の由。

スミ(欄外)和歌の浦米榮旅館へ礼状発信。

二十八日(木) 快晴

スミ(欄外)午後、島田友春氏、溝口禎次郎氏の「〇」絵絹持参。

スミ(欄外)大阪市南区日本橋筋一丁目東北角 奥田弥生氏より、鉄道便にて松茸一
籠着。

スミ(欄外)わんや主人、双壁会の用件にて来訪。

スミ(欄外)大阪市南区日本橋の奥田氏より、松茸の案内「送」状着。当日直ちに礼状
を發す。

半ズミ(欄外)大阪市西区江戸堀南通一丁目二〇 飯田呉服店美術部より、「〇」紙本

の催促状着。倉嶋次之亮氏より、近々揮毫依頼の為、扇面一枚發送の由来信。
例の小林正月より「〇」画の催促来る。

十一日 概ね晴

高寫屋使、半切の催足ニ来る。廿日、大阪にて展観の由。岩崎氏、本牧学校教師、屏風を見に来る。青木鎌太郎、箱書に来る。小品「稻妻」。越後 桑原藤右エ門より、梨十三個到来す。午後、国民、大和、朝日、時事新聞記者来。御屏風の件の記事の事に就いて。

十二日 曇天

寺内新太郎、井上清氏、御屏風受取に来る。午後、自動車にて送くる、横浜駅まで。佐藤栄市使、箱書に来る。尺五、粗画「白菊」。岡野拾策氏、春田の件にて来。山田様会ふ。

十三日 雨

山形己之次郎氏、夫人同伴にて下の下村まで来り、御屏風拝見の為めなるも、發送後故断る。大観氏より封書一、書留一、来。京都出品の絵に故障の生せしと云。斎藤隆三氏より、電話、明治神宮拝観の事と京都出品画の件。

十四日 晴

後藤良、北澤楽天氏来訪。画室へ通る。神戸新聞社の依頼、尺八「錦木」(錦木の下に二本の百日草あり)、書留にて出す。辰澤氏宛封書二通出す。一つハ書留。植清、廿六円支払ふ。

十五日 晴

午後八時にて京都へ御立ち。同車中、斎藤隆三、中村岳陵氏などあり。

十六日 晴

大掃除をなす。畳屋二人、手伝ひに頼む。横浜日々新聞記者来。

十七日 雨

小倉市 藤田弥五郎氏宛、返事出す。山形よりの男三人、石燈籠そなへのため庭を見に来る。

十八日 晴

沼津銀行へ返事出す。松寫勝之助へ端書にて出来の通知出す。奥田氏来。電燈会社より、電球等調べに来る。高寫屋(京橋)より、電話にて催足。

十九日 概ね晴

神戸新聞社 米津氏より、端書にて受取来る。

廿日 曇後雨

寺内へ屏風を見に行く。未だ仕上らず。明後廿二日に出来の由。松寫勝之助、尺五(菩提樹の下に坐の老人「○」あり。画題は「静寂」との由)一枚渡す。旅行先きの先生より、荷物のみ先きに送り来る。二三日中には御帰りならん。

廿一日 雨

終日雨。別して事もなし。

十月

十月一日 晴

一過見事に晴れる。四ヶ所、早速、平塚を呼ぶ。損害甚だ多し。被害を^レ受けし二三の家へ見舞へにまわる。平塚の手にて土方来る。坪井、木下氏来。箱書渡す。柿沼氏の分も渡す。小柳町大久保より電話にて見舞ある。大阪高島屋より電報にて見舞。

二日 晴後曇

植清、十六人、五分、分金三拾三円渡す。石原様、昨日も今日も来らず。寺内新太郎氏来。午後三時半頃、先生東京へ御出まし。

三日 晴

奈良新弥様より、梨贈らる。山本良次郎氏^レより、風害見舞状来る。神戸新聞^レ氏来。高島や殿澤来。南米岳来。箱書、春草双幅、蓬萊の図にて大観の箱書なりなり。

四日 晴後雨模様

中畑米次郎氏より、松茸到来せるも、全部^レしてある。琅玕洞来。安立寺 山田時氏より、見舞^レ来。小林源太郎氏、手紙持参せし日本橋の樋口の使へ箱書「遊魚」、渡す。

五日 晴

午後三時、辰澤氏の招待にて亀嶋町借楽園へ御出まし。十一時頃、御帰宅。

石原氏不来。

六日 曇天

太谷の代人、地所の件にて来。東京の後藤氏より、電話にて面談申込み来る。十四日、午前十時頃を約す。千葉 和田新氏、箱根 妹尾氏より、催足の書翰来る。

七日 晴

比叡山延暦寺より、松茸到来。京都 田中金三郎より、松茸到来。

八日 晴

斎藤隆三氏来。

九日 晴

島田友春氏来。

十日 晴

朝、堀口氏へ電話を掛ける。下の春木氏宅を訪ふ。破損せし屏ハ高橋源三とか云ふ出入の者の手にて、修復させる由。倉林外七氏、堀口氏、屏風を見に来る。泰文社の使、金地屏風半双(二枚曲)、鑑定ニ持参。席画らしき「黄初平」なり。四十二年頃の作。青山南町五ノ三三 内山栄吉氏、買取し由。内山氏宛葉書にて真筆の由申し送くる。

扇面は何れも丸万堂へ描きしもの。

二十日 曇天

大塚源太郎、預りし書類(銀行手形等)返送す。

二十一日 晴

大塚源太郎氏より、受取りの端書来る。

来信(備忘) 小林源太郎(箱書催促)。

万葉支吉(岐阜県麻生野小学校長)

発信(備忘) 小林源太郎氏、出来通知。

高田早苗氏来訪。小野善兵衛代人(本人の弟と称す男)来。画帖(松雪積り)渡す。

二十二日 概ね晴

山形己之次郎氏、石燈籠の事にて袷天マテを着た男一人連れ来る。南米岳来。尺五、依頼の件なり。

二十三日 彼岸仲日 曇天

明治神宮造営局の井上清氏来。画室へ通す。静岡 長倉太郎氏来。

二十四日 晴

奥様、東京へ御出掛けになる。税務所の官吏来る。山田様に出て戴く。石原様、午後より屏風の手伝ひ。

廿五日 曇天

長野草風、山村耕花、外一人同伴来訪。山村氏、トンボ玉置いて帰らる由。山宮半四郎氏より来信。

廿六日 曇天

旧曆十五夜二当る。来客もなし。

廿七日 曇

留守中、竹内常吉来り、大森尼瀬門氏の幅預りあるや否や聞きマテに来る由。廣業、玉堂の対幅にて先生の梅と三幅にする由。

廿八日 曇

午前七時前、美術院へ御出掛けになる。柿沼氏より、電話にて箱書をとりに来る由申し来る。十時半頃御帰り。

廿九日 雨

午後より御出掛けになる。夜になりて雨繁く降る。

卅日 雨

朝から雨、見事な降り様なり。夜十時過、下の春田と云ふ家より電話あり。堤が潰れて家の一部を [] した由通知あり。十一時、益々荒れる。雨の音のみ強し。

氏より、桃一箱来る。

十日 曇後雨

泰文社より、箱書(鷺二鳥双幅真筆)の為め送り来る。中村岳陵氏来訪。

十一日 雨後晴

午後四時半、三宅博士を桜木町駅へ迎ふ。大胡医師と立合ひの上、診察済む。七時頃、自動車に送くる。

十二日 日曜日 晴

三宅博士宅(小石川竹早町七六〇)へ御礼に行く。松島勝之助、大塚弥太郎の使ひにて来り、先日の一万円の一件の書類、返済の請求を申し来る由。名古屋新聞の社員と云ふ人二人来り、名古屋市の記念展観の出品画を依頼に來りたる由。

十三日 晴

山浦瑞洲、依頼画絹統(〇)二枚、維摩、布袋、半切、書留便にて出す。泰文社依頼の箱書、鷺と鳥(双幅)、書留にて発送。名古屋朝日新聞社美術部より、十週年記念展観の寄附申し来る。紙巻一本、並びに封書来る。溝口禎次郎氏、宮内省の代理にて李王家献上画の謝礼ニ来る。金八百円也。

十四日 曇

黒須氏来。観山画集第三持参。名古屋朝日新聞社宛小包(捲きもの)返送。明

治神宮下(下)屏風ノ下図、初めらる。三宅博士の手紙を持参なし石井とか云ふ看護人、夕刻来るも一先返す。

十五日 雨

長野 柴田克己氏より、林檎一箱着。高寫や美術部 殿澤来。小品物催足。本月一ぱいの由。水戸 渡辺定氏来。雨後の朝渡す。(二尺五寸、小切)横物、筆料未納。

十六日 雨晴

高谷豊之助氏使 安田市太郎来。預りの画帖一先返す。大観氏より電話あり。

十七日 晴

島田友春来。観音の幅(宅磨の白磁)持参。美術院 名取氏、箱書持参。「魚境」の蓋なり。預る。

十八日 晴

午前七時半、先生、京橋 辰澤様まで御出になる。精藝出版合資会社員 宮木直一氏来。来意ハ現代大家集をつくらから五点程、御知らせ願ひ度しと云ふ。

十九日 概ね晴

奥様等、院展へ御出掛け。村松雨石同道にて石原様画室へ上る。島田悦山来。国勢調査員来る。高築富次使、箱書持参。扇面、石革(革カ)、白藤、色紙、落苔、

卅一日 晴 二三日來甚だ暑し

時春君の爲め、看護婦一人呼ぶまねく。昨日ハ飯野氏と堀医師と立合して戴く。英時君、夜、東京行。

九月

九月一日 二百十日 晴。

午前七時、美術院展会場へ御出掛け。博物館、溝口様李王家の幅、春(富士に半月の図)、秋(山に太陽、絵巻風の壁様の山)。二幅御届けす。

二日 曇天 時雨あり

午前七時、先生御出まし。天心零社祭なり。津田藤太郎氏來訪。水道工事費、二拾八円五十錢納む。午後五時、先生帰宅。

三日 曇後驟雨あり

長谷の雛屏風初む。老松なり。

四日 雨

林の奥様御來訪。山浦瑞洲來。三拾円を御菓子料として包みきたり。統筆「絹」二枚の外、半切一枚を依頼したきと云ふ。断る。統筆絹ハ、近々出来なれば、何れ出来の上ハ送るからと返答なす。午後殆んど雨小なる風さへ出る。二百十日に暴れもせず、此の二三日雨などはけしく降る。

五日 晴

奥村藻山、小「児」玉素行、藤田青花、山本、下の兄等、五人画室へ來り研究会をこしらへるの何かのと相談なし帰る。先生存せぬ事なり。飯野氏宅へ電話にて、明日の往診を乞ふ。時春様、大分悪し。夜、堀医師を乞ふて診察を願ふ。

六日 晴

島田友春氏來。越後の小管充氏來訪。八王子市お伊楚へ、招待券四枚送くる。茨城県金江沢、青野きのえなる者、封書にて絵がほしいとて、自分ハ今逆境に居るから充分な礼ハ出来ない。わづか二拾円、貯蓄せし分を差上げ度いと云ふ。不在の旨返事出す。

七日 晴

石原氏來。倉林氏の弟と云ふ人、盆盃を持参なし、例の絵、本日中に頂戴出得るかと云ふ。島田友春氏、「○」尺八に水鶏「クヒナ」ノ図發送。長谷榮吉氏來。雛屏風「○」一つ、並び「○」尺八納涼ノ図、一枚渡す。雛屏風の潤筆料として金七百元持参。受取出す。外一百円を出し半切一枚、新に依頼す。

八日 慨晴

山田様と飯野様宅へ伺ふ。時春様の事にて意見を問ふ。島田様より、卯沢山來る。

九日 晴

小管充氏、尺八、牧童一枚發送。図、牛二二人の牧童眠る。小諸、島田常藏

十六日 概晴
石原氏老婆来。

十七日 晴

島田住美氏来。乾山の皿持参。

十八日 晴

奥様、太田町飯野氏宅まで謝礼に出らる。京都、九州堂「白描図」(美術院寄
附画のうち)鑑定ニ持参。

十九日 東北の風 雨

奥村藻山氏来訪。町田清治より、三幅対の受取来る。

廿日 雨

廿一日 雨

赤羽雪邨氏使、画集一部持参。

廿二日 雨後晴

奥村氏、依頼の幅、塩川へ廻す。二十三円にて出来る由。

廿三日 晴

本郷田町の奥様、御光来。一泊。加奈太サン生命保険会社、書面一通出す。

廿四日 晴

田町奥様御帰り。山口使、色紙直し(富士)、箱書渡す。伊東源四郎、箱書返送。

廿五日 晴

神戸新聞社員 米津獨坐氏来。尺八の催足。来月廿日頃、展観の予定。

廿六日 曇天

美術院鑑別にて、先生御出京。午後四時前帰宅。午前、千葉 島田友春氏来。

廿七日 曇天

先生、午後七時半頃帰宅。十時頃、報知新聞より電話にて、今日の鑑別の感想を聞き度き由。

廿八日 概ね晴

今日より絵を初めらる。山水の下図が付けられてある。

廿九日 晴

小玉氏来訪。

卅日 晴

東神火災保険会社員 高柳良助氏来。群馬県利根郡、小野伝右エ門氏が(令兄の由)、昨年六月頃、御依頼せし「と云ふ」画帖の催足。一寸、失念す。覚えなし。電話本局四四八七番(会社)。

六日 晴

章君、英時君、山田様、御同伴にて富士へ向けて立つ。石倉翠葉の代人、色紙の催足マツニ来る。小林源太郎氏、榊原氏の箱書(鯉魚)依頼されて来る。預り置く。夜、植清公をたのみで来る。明日より来る由。

七日 土曜日 雨

終日、降ってハ止み、止むでハ降る。入梅の如し。「清」来るも雨のため朝のうち帰る。

八日 雨

朝より小雨降る。宮越正治氏より、暑中見舞として例年の如くビール三ダース贈らる。礼状を出す。町田清治より、雅邦先生筆三幅対、送り来る。富士登山隊、夕刻帰宅。

九日 通り雨

引文／七〇六
(以上欄外)

朝より降ったり照ったりする。町田清治へ書留にて銀行小切手、金拾円返送す。補筆証明の謝礼らし。断る。川村東陽使い箱書渡す。

十日 曇後雨

本所大平町、田中弘三より、封書にて依頼画の事に就いて申し来り、現金にて返済を乞ふ旨申し来る。金田伝兵衛、尾澤八郎右エ門等にて大正元年に依頼せしもの。夜、雨降る。

十一日 水曜日 晴

田中弘三氏宛、返信出す。何日にも、預り証引換へにて返金の事、申しやる。

十二日 曇後雨なれど時々晴る

高嶋屋使、京都、飯田氏の代理にて来る。殿塚なり。箱ウチワ十本のうち一本だけ御染筆願ひ度く、猶々、曆の記念画帖(尺三巾、横物)もとの事。ウチワ十本のうち九本ハ返済すべき事。

十三日 朝雨なれど後晴れる

伊勢山大神宮祭礼の寄附金とりに来る。一円渡す。美術院より、出品の寸法を聞合せ来る。

十四日 概ね晴なれど風雨の気味有

栃木県足利町二 恩田半之助より、客車便にて鑑定の幅来る。偽筆なり。図「寿老」二五巾、以前、千登世へ描きもの。植清へ三日分六円支払ふ。東京時事新聞記者 山梨勝治氏、大観氏名刺持参にて来訪。出品画の記事の事なり。玄関にて帰す。恩田半之助、町田清治の小荷物、鉄道にて出す(公園前扱)。運賃二ヶ、一円拾銭也。山田福太郎氏夫人来。文(文見)の大幅、鑑定に持参。偽筆なり。富関子の件にて、寺館廣次夜に入つて来る。十一時近く帰る。

(欄外)十五日

箱根 妹尾春太郎来。半切の催足マツ。福住様、箱書持参。墨絵「遊女の後姿」預る。奥田地氏(高田様紹介の)来。これも催足マツ。

封書にて後一枚の尺八の件云々申し来る。石川の分ハ昨年十一月廿七日二渡せし尺八、問答(二千円持参)の外に望むらし。

廿八日 晴

明治神造営局技師 井上清氏来訪。来意ハ屏風の件なり。十月二十日前に入用の由。千葉不動堂 尾川昭純氏より、浜納豆来る。水道局より、人夫四人来り工事をなして帰る。此度メートルになる。高築誠之助来。谷中寺内より、生姜来る。

廿九日 晴

石井柳助氏より、画集一部贈らる。三尺「○」中、横物「富士」(虹あり)、尺八、「○」横物(釣人)、共に双壁会の分にて、午後五時頃御出掛けのとき御持ちになる。夜に入りて大分涼しくなる。二時まで御帰りを待つ。遂ひに御帰りなし。

卅日 晴

今日より、小学校休みになる。音菊より、電話あり。先生宿泊の由。午前十一時御帰りになる。

卅一日 概ね晴後曇

櫻井定次郎来訪。□七百円にて尺五三幅対を描けといふ。五拾円、内金として預りをる由。紀淑雄来。税務所員二人来。

八月編註

八月一日 晴

根岸鉄太郎より、画架一個贈らる。鉄道便にて来る。山浦瑞洲来訪。伊東源四郎より、孔子の図箱書に来る。滞在地ハ左の如し。
愛知県知多郡成光町、大橋倉次郎方

二日 曇天後雨なり

長谷宗吉より、箱書に来る。半切「京の夕」。画の蔵品の□(筆力)理初める。七時過ぎ高築富次の使、箱書に来る。尺八の横物らしきに布袋の袋に腰掛け月を指さす図(墨絵淡彩)を持参。よく見るに偽筆と判明し箱書断る。観山記の文字のみなれハ、箱裏を消すして渡す。新潟県新潟市本町通八番地、阪井淳一氏の依頼の由。油断ならず。用心く。

三日 曇り後荒れ模様ナリ

なし。

四日 曇後雨

川口誠三郎来訪。尺五残の催足。マ午後風雨甚し。

五日 曇り荒れ模様

税務所へ手当金額、歳費高等書き出して返送する。定室帝室技芸員会費六円支払ふ。午後、飯島医師を□□し時春様診を乞ふ。大雷雨あり。午前、島田友春氏来。

直接、柴田氏へ延引詫状差出す様約す。

十六日 晴

東京日日新聞の佐々政徳氏より、中元来る。

来信 溝口禎次郎氏より、李王家献上画の催足^{マツ}。

十七日 晴

高鷲屋、高橋初郎氏来。箱書預る。塩瀬に観音を描きしもの。午後退院の事にて佐野病院へ行く。

十八日 晴

小林正月より山葵漬来る。

十九日 晴

浜中移山(華山の三組盆の)来。半切の催足^{マツ}。片岡平兵衛氏来。長野草風氏の紹介にてトンボを半切と交換と約せし人、矢張催足^{マツ}に来る。

廿日 晴

松澤敬次郎氏来。箱書渡す。

廿一日 晴

別になし。

廿二日 晴なれど雨あり、大いに凌ぎよし。

水道局より工事の調べに来る。

廿三日 曇後雨

電話料第一期分、八円八拾八錢(但し第二期の基金もふくむ)、水道税納む。夜に至り驟雨降ること甚だし。

廿四日 曇天

町田清治来。雅邦先生三幅対の補修の証明書の如きものを求む。

東京牛込拂方町廿五 田中良助

東京会(神田五軒町十番地)より、書留封書にて川崎銀行小切手五拾円来る。石原氏へ立替へし分なり。

廿五日 曇雨荒模様なり

三尺巾、縦一尺五寸分のものへ雨後の富士(虹あり)を描き初めらる。此の廿九日の双壁会の分なり。

廿六日 晴

奥村藻山氏、母堂同伴にて来訪の由。高嶋やへ箱書(観音)届く。

廿七日 曇天

石原春秋氏来。石川県能美郡板津村字高堂 高林清之氏より、昨廿六日小包にて菓子来る。暑中見舞ならん。礼状出す。齋藤隆三氏来訪。石川安助より、

五日 晴

静岡県小山町音淵、小山正月、鑑定物発送し来る。常信の贖物也。五拾円、東京会の分、石原氏へ立替へる。上色消二匁目、拾五円六拾錢也。

東京日本橋区大伝馬町二丁目 河本金箔店 電話 浪花 一五一七番 振替

口座 東京 三〇二〇番

来ル九日、保田龍門氏を同人に□□すべく相談会あり。御来会を乞ふと日本美術院より封書にて申し来る。

六日 晴 風あり

小林正月、小包出す。

来信(備忘) 井上徳三、小物催足マテ。

七日 晴

川村東陽、箱書の催足マテ、葉書にて申し来る。山形巳三次郎氏来訪。

八日 晴

浦山幾次郎、鑑定品送り越す。尺五墨絵、七夕ノ図。偽筆なり。有田音松下ラック商会より妙な本送り寄越す。中川忠順氏来。午前十時少々過ぎより四時、近くまで。

九日 晴

浦山幾次郎(鑑定)、有田音松(寄賜)、書留小包にて返送。井上徳三父来。小品の催足マテ。亦、小さき枠張預る。以前の預品と寸法同じ。美術院へ電話にて

今日の会議欠席の旨話す。

東京市外巢鴨謙和会別館 中村千代松 北海道美術展覧会図録一部、送り来る。

十日 晴後雨なり

北上未亡人子息来。

十一日 晴後雨 昨日と同じ天好マテ

寺内新太郎氏来。中央美術協会より中元。大阪、大日本美術株式会社より、鑑定品着。寿老ノ図、真筆也。

十二日 晴なれど風あり時々地□□起る

長井利右衛門より例年の如く茶来る。黒須氏夫妻来訪。

十三日 晴

大日本美術株式会社、鑑定の幅返送。小柳町大保久保の若夫人来。琅玕洞主人、中元二来る。児玉氏紹介の人、山本某来。

十四日 晴

橋本永邦氏来。日親絵巻出来て来る。

十五日 晴

渡辺実、奥田某(高田様紹介の人)、柴田克己氏の依頼にて田口卯之吉氏来訪。

⑨ 編者が加えた注は「」で示した。

⑩ 適宜、読点や句点、並列点を付した。

一、収載した史料の概要は以下の通りである。

『日記帳』：紙本墨書・袋綴じ冊子装、丁数九六、

縦二四・五cm 横一六・五cm 厚一・三cm

【表紙】

日記帳

【表紙裏】

自 大正九年七月一日

至

大正拾年十月吉「廿」日

第二号

七月 七月（欄外）

一日 晴

横浜開港記念日 六拾一年目の由。

発信（欄外） 川口誠三郎、礼状。

来信（欄外） 箱根、妹尾春太郎氏より、箱書来る。多分半切揮毫の旨、共に願ひ度い、との意味ならん。井上徳三より、「うちかけ」と云へる本五部、送らる。中根

人夫、賃金九拾九円十二銭渡す。但し六月十五日以後の分なり。

二日 晴

画室の障子を簾と取り換へる。すっかり夏の気分になる。午後、川柳詩人、赤穂義士会云々の名刺持参なし某来る。主人不在なれば後日出直すとて帰る。

来信（欄外） 山浦瑞洲（封書）紋の催足。四谷区塩町一の廿四。

発信（欄外） 高橋葛之助、春草筆小品、鑑定物及び案。

内状（葉書）発送の件。

三日 晴 南の風あり

高橋葛之助の小包出す。伊藤栄市、鑑定に来る。初音町時代の作、白菊と□
□の図（尺五）、席画らし。真筆。乾南陽氏来。美信、踊の図一幅を残し後二幅返す。半切と交換になるらしい。

至 大正十年十月廿日

英時記

多平記

至 大正九年十月廿五日

自 大正九年十月廿六日

四日 晴 日曜日

櫻井定次郎来。法月鋭児なる者より日本画家評論と云へる本三部来る。これにて半切一枚と云ふ。山形、中村大助氏より封書（催足）あり。



挿図5 『日記帳』大正9年9月13日記事



挿図4-1.2 下村親山《日月》外箱の側面貼付のラベル

る観山の日常が垣間見える。

結び

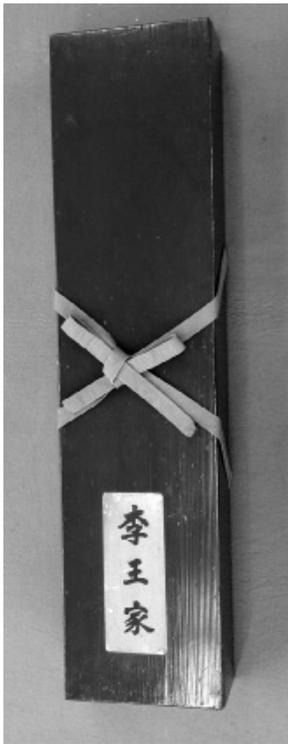
『日記帳』の記事から、公用の往來訪、大規模な応需制作などで多忙を極め

井上清氏、同道にて明治神宮御屏風揮毫の礼に来る。金七仟円の御下賜になる。一二月一三日「石原春秋氏、明治神宮御屏風手伝揮毫料として金二百円渡す。」九月半ばに下図に取りかかってから、およそ一ヶ月で完成したことが分かる。また、作品の完成にあたって、大手新聞各社の取材があったこと、日本画家の石原春秋が制作にあたって助手を務めていたことが読み取れる。

大正九年は、夏から秋にかけて、右記二点の重要な応需制作があったため、八月一三日「美術院より、出品の寸法を聞合せ来る」という記事があるものの、院展への出品を控えたものと思われる。一方、翌年の日本美術院再興第八回展には、意欲作《楠公図》(三幅対、東京国立博物館蔵)を出品した。英時『下村観山伝』によると、この作品は楠木正成を尊崇した原三溪の懇請によって描かれたとされ、三溪自筆の蔵品目録『松風閣蒐蔵目録』(三溪園蔵)等にも蔵品として記されている。明治に入り、南北朝正間論の論争の末に南朝が正統とされると、楠木正成は「大楠公」と称され、忠臣の鑑として尊崇の対象となり、歴史画の主題として好まれた。『日記帳』に次の記事が認められる。大正十年八月三十一日「原富太郎氏へ父の今回院展出品画楠公(尺八絹本三幅対)の原色版持参す」、「拾年八月中出来品」(巻末)「楠公(原富太郎氏依頼品三幅対)院展出品画 極彩色密画。」

の揮毫依頼を受け、『春秋山水図』(二図)を作る。英時が記す『春秋山水図』は、現在横浜美術館が所蔵する『日月』註、挿図2)のことである。王世子殿下御婚儀とは、韓国併合時に李王家の一員として王族となった皇太子李垠(王世子)と梨本宮守正王の長女方子女王の結婚を指す。双幅が二重箱に納められており、外箱の蓋上面に「李王家」の墨書紙片(挿図3)、側面に「李王家東京邸」の蔵品票(挿図4)が貼付される。『日記帳』に次の記事がある。七月一六日「来信 溝口禎次郎氏より李王家献上画の催促」、八月二八日「今日より絵を初めらる、山水の下図が付けられてある」、九月一日「午前七時美術院展覧会場へ御出掛け、博物館溝口様李王家の幅春(富士に半月の図)秋(山に太陽、絵巻風の壁様の山)二幅御届けす」、九月十三日「溝口禎次郎氏宮内省の代理にて李王家献上画の謝礼ニ来る。金八百円也」(挿図5)。美術学校同窓で帝室博物館美術課長の溝口禎次郎(宗文)の周旋で宮内省高官の依頼を受け、二週間足らずで擱筆したことが分かる。雪を頂く富士に月、懸崖に根を張る松に太陽という図様は、富士山と常緑の松が吉祥を象徴するとともに、日本(富士山)と朝鮮(松)、「日月」が陰陽思想、太極を暗示するようにも映る。

英時『下村観山伝』によれば、明治神宮内殿のための御用屏風『四季花卉図』(六曲屏風一雙)は、大正七年三月ころに、明治神宮造営局より「下命に与つたという。『日記帳』にいくつか関連する記事が散見される。七月二八日「明治神宮造営局技師 井上清氏来訪。来意ハ屏風の件なり。十月二十日前に入用の由」、九月一四日「明治神宮屏風ノ下図、初めらる」、一〇月一日「午後、国民、大和、朝日、時事新聞記者来。御屏風の件の記事の事に就いて」、一〇月二日「寺内新太郎、井上清氏、御屏風受取に来る。午後、自動車にて送くる、横浜駅まで」、一二月一日「萩野仲三郎氏(明治神宮造営局長)、



挿図3 下村観山《日月》外箱の蓋(表)



挿図2 下村観山《日月》、大正9年(1920)、絹本着色・双幅、各145.5×51.0cm、横浜美術館蔵(89-JP-004)

多平は『やまの上』において「下の下村」と通称される下村清時(観山長兄、日本美術院彫塑部同人、号・豊山、豊悦)邸に転宅したものと思われる。

観山の動向

この間の観山の特記すべき活動を、大きく公務他と制作に分類して概観する。

一、公務他について

公務については、日本美術院に関する事柄が中心となる。保田龍門の同人推挙に関する会合案内(大正九年七月五日)にはじまり、再興院展の監査会出席(八月二六日)および第七回再興院展初日招待日(九月一日)の出席、翌日の天心零社祭出席(保田龍門の同人推挙式か)、同人による京都・奈良における研究旅行(一〇月一五日から同二三日)、そして「北米クリーブラント博物館主催巡廻展覧会」出品に関する実務処理(十一月三〇日、十二月二五日、二七日)などが、大正九年の主な活動として挙げられる。翌年の日記では、記事がしばしば割愛されるが、再興院展出品画の監査(八月二六日)、院展初日の招待日出席(九月一日)などが記されている。そのほかに、観山会(明治四四年に日本橋倶楽部で発会、観山芸術を愛好する当時の政財界著名人の集まりで洪沢栄一や法学者の高田早苗などが創立会員に名を連ねる)および同会が発刊する『観山画集』に関する記述(大正九年九月一四日、一〇月三一日、十一月三日、同五日、同二八日)が認められ、観山の創作を後援する観山会の活況が読み取れる。

大正九年九月五日の記事に「奥村藻山、児玉素行、藤田青花、山本、下の兄等、五人画室へ来り研究会をこしらへるの何かのと相談なし帰る。先生存ぜぬ事なり」という行が見られる。日本画家の奥村藻山、児玉素行や仏教美術の研究者にして蒐集家の藤田青花、観山長兄の下村清時らが、研究会結成の相談に画室を訪れている。これは、翌年九月一三日「三溪園より、柿本寺、及多武峯寺の軸二点を持参。しばらく貸与すとのこと。仏像研究会の連中、松田福一郎氏を初め、井澤蘇水、藤田青花、御明亀五郎、入江美法氏等来訪」の記事に見える「仏像研究会」のことを指すものと思われる。原三溪が愛蔵し、現在大和文華館が所蔵する重文《柿本宮曼茶羅図》(「柿本寺」と、《藤原鎌足像(多武峰曼茶羅)》(「多武峯寺」)を借覧し、観山の画室において研究会を設けたものと推測される。下村英時は『下村観山伝』(大日本絵画、昭和五六年)において、観山の古美術愛玩趣味について、「学生時代に培われた有職故実の研究に基くものであったが、経済的に余裕を持つに従い、次第に愛玩品の蒐集もその数を増し、範囲が拡大し、又それと共に古美術品に対する知識と鑑識眼は精到を加えていった」と評している。借用した原三溪所蔵の名品の他に、家蔵品を若い後進の研究活用に供することもあった(大正九年一二月八日、大正一〇年九月二〇日)ことが分かる。

二、制作について

大正九年後半には、大きな委嘱画を二件揮毫している点が注目される。すなわち李王家への献納を目的とした記念画と明治神宮造営局より下命のあった御用屏風である。

下村英時『下村観山伝』の大正九年の部分に次のように記される。「この夏、王世子殿下御婚儀に付、在京宮内省高等官より御祝として献納すべき記念画

【資料紹介】下村観山画房日記『日記帳』

柏木智雄

解題

はじめに

横浜美術館は、平成二五年度に開催した「生誕一四〇年記念 下村観山展」(会期…平成二五年一二月七日から同二六年二月一日まで)を機に、下村観山の画房日記六冊(『やまの上』『日記帳』『山の松葉 下村家』および無題三冊)を観山の遺族より受贈した。このうち、『やまの上』(大正八年一〇月一日から大正九年六月三〇日まで、記録者…入江多平)を、当館の研究紀要の第一六号・一七号において翻刻し解題を掲載した。本号では、『やまの上』に続く『日記帳』(挿図1)を翻刻し、解題を付す。



挿図1 『日記帳』表紙

『日記帳』には、大正九年七月一日から同一〇年一〇月二〇日までの画房および家中の出来事が摘記されている。ノドに「①伊勢伊製」の印刷文字がある市販の冊子を使用し、一丁の表側、大正九年七月一日横浜開港記念日の出来事から起筆され、巻末の九六丁表側に「拾年拾月中ノ揮毫品」として八点、同裏側に「拾年七月中出来品」四点、「拾年八月中出来品」六点が記録され欄筆される。「揮毫品」「出来品」の語の用法について日記に説明はないが、前者が応需制作で後者は自発的な制作を概ね意味していたと推測される。『やまの上』と同様にこの『日記帳』においても、書翰の受発・通信、来客、観山の活動(制作、外出)、金銭の出納など、画房・家中の動向の詳細が記され、膨大な制作依頼と作品納品の催促、箱書、鑑定の依頼などの備忘が、日記の最も大きな役割であったと思われる。実際、応需制作の諾否、画料受領に関わる行き違いやなどが少なからず散見される。

表紙裏に、おそらく下村英時(観山の三男)の筆跡で、「自 大正九年七月一日 至 大正九年十月廿五日 多平記」自 大正九年十月廿六日 至 大正十年十月廿日 英時記」の補記があり、記録者が入江多平と下村英時であったことが示されている。当時、入江多平は観山邸で住み込み書生をしていたが、大正九年一二月一〇日の記事に「本日、入江多平氏、下村晴時氏二階へ移転す」(「晴時氏」は「清時氏」の誤記)と英時が記している。何らかの理由で、

横浜美術館研究紀要 第20号

平成31年3月31日発行

編集◎横浜美術館学芸グループ

翻訳◎クリストファー・ステイヴンズ(pp.29-33)

発行◎横浜美術館
(公益財団法人 横浜市芸術文化振興財団)

〒220-0012 横浜市西区みなとみらい3-4-1
Tel.045-221-0300

印刷・製本◎株式会社 野毛印刷社

©横浜美術館 2019

Bulletin of Yokohama Museum of Art No. 20

Date of Issue : March 31, 2019

Edited by Curatorial Department, Yokohama Museum of Art

Translated by Christopher STEPHENS (pp.29-33)

Published by Yokohama Museum of Art (Yokohama Arts Foundation)

3-4-1, Minatomirai, Nishi-ku, Yokohama 220-0012 Japan
Tel.045-221-0300

Printed by NOGE Printing Corp.

© Yokohama Museum of Art 2019